Sint Unum

Passing the Baton

～バトンを渡す～

シント・ウヌム　　No. 176　　2013 年 4 月

目　次

はじめに　2

アフリカ　4-11

カメルーン　5

ナイジェリア　9

アジア　12-31

日本　13

マレーシア　19

ミャンマー　22

シンガポール　26

タイ　30

ヨーロッパ　32-48

イギリス/アイルランド　33

フランス　37

イタリア　42

スペイン　45

ラテン・アメリカ　49-55

ボリビア　50

ペルー　54

最新情報

誓願　56

リーダーシップ・ティーム　57

註：　各国の地図の縮尺は様々です。

はじめに　　～バトンを渡す～

寒い冬が過ぎ、最初に春の兆しに気付く瞬間はとても感動的で驚きに満ちています。春を告げるしるしがそこかしこ現れ始めています。スノードロップス、クロッカス、サクラソウ、そして、木々に芽吹き始めた小さな緑の葉…,すべてが私たちを幸せな気持ちにしてくれます。ここイギリスにも、やっと春が訪れました！世界の他の場所では、またひと味違った自然の変化を味わっておられることでしょう。
たとえば、遠くの山々のかすかな、繊細な色の変化など…。

> “・・・この「シント・ウヌム」は、現セントラルチームによる最後の編集になります。
>
> ・・・次期セントラルチームにバトンを渡します！

ここに、「シント・ウヌム」最新号をお届けできるのは大きな喜びです。皆さまの貢献に心から感謝いたします！多様な記事やニュース満載で、とても興味深い、貴重な内容、自然界に充ち溢れる希望のきらめきのように命とエネルギーに満ちたものになっています。また、熱意や誠実さ、開かれた心、深いコミットメントなどをそこから感じとっていただけると思います。どうぞお楽しみに！

個人的な使徒職体験や様々な人々との出会いの分かち合いに加えて、注目をひくのは、宣教350年の祝いに関する体験や考察の分かちあいです。将来への希望、チャレンジ、喜び、感謝、インスピレーションなどをそこから豊かに感じとられることでしょう。管区総会の反響もいろいろな国から寄せられています。この夏（8月10日～31日）フランスで開かれる総会に向けて、私たちの準備を促すヒントとなることを願っています。

会の宣教351年目が、いみじくも総会の年と重なりました！将来がどのように進展していくのかわからないまま、私たちは、すでに未踏の道に足を踏み入れています！
「総会を準備しつつ待つこの時期は、私たちが、“聖霊に捕えられるままになっていく”（ニコラ・バレ）特別の時です。命を与える共通の未来に向けて私たちがどのように導かれているか注意深く聴こうとするとき、聖霊が絶えず私たちの心を開き、自由にしてくださいますように。」（2013年総会開催を公表するセントラルチームの手紙より）

最後に、この「シント・ウヌム」は、現セントラルチームによる最後の編集になります。過去6年間のシント・ウヌムを全部通して読み返してみると、会の命がそこに元気に息づいていることが感じとれます。希望や喜び、冒険や暗闇の中での探究、さらに先へと道を開く生命力をそこに確かに感じることができます。6年間の旅、具体的な現実・生活についての物語がそこにみごとに織りなされていることに、私たちは、あらためて心を打たれました。つねに命を選びつつ先へ進んでいく…！！この命がシ

ント・ウヌムをとおして、これからも、より広く、より深く、人々と世界をつなぎ続けていきますように！

愛読者の皆さま、記事を送って貢献してくださった方々、リンクパーソンとして各国とセントラルチームをつないでくださった方々すべてに心から感謝いたします。コンピューター技術を最大限に駆使しながら、持ち前の素晴らしい創造力、つねに新しいアイディアを提供しつつ、惜しみない貢献をしてくださったメリサには、特別に深い感謝の意を表したいと思います。また、コーディネーターとして、細部まで正確に、効率的に面倒なプロセスを進めてくださったアリスに心から感謝いたします。最後に、翻訳を担当してくださった影の協力者に心からお礼を申し上げます。これらすべての方々の助けなしにシント・ウヌムは決して生まれなかったでしょう！

これまでの皆さまのご協力に感謝しつつ、次期セントラルチームにバトンを渡します！

セントラルチームを代表して

深堀方子
メールアドレス：masako@ijnico.or.jp

Africa

アフリカ

Nigeria

Cameroon

カメルーン

“愛に満たされた祝典―初心にかえって

2012 年の記念の年に幼きイエス会々員はミッションの様々な現実と場所に色どられて祝われました。カメルーンでも全く同様でした。

オルタンスとマリ・ベルトィユ

この祝典は各共同体が企画し 一般の方々を交えて行事が行われました。Sr. オルタンス・ドクトウコと Sr. マリ・ベルトウイユ・エロガが 2012 年 10 月 6 日に初誓願を、Sr. リディー・ンゴノ・アンデラが 10 月 20 日に最終生誓願を宣立、カメルーンの準管区にとり特に意味深い出来事でした。事実、シスター達は長い間霊的準備をし、ニコラ・バレから受継いだ霊的遺産を探求し、キリストに従うために自らの奉献を新たにする機会が与えられたのです。“与えられた個人の歴史をふり返り、キリストに従う召命を受け、幼きイエス会々員としてより実り多き宣教のために生きる喜びの源泉を探求する”・・・このテーマに沿って全準管区は黙想を通してその実りを得ました。

黙想をより良いものとするため、私たちの信仰における先輩である Sr. ブリジット・フルーレにご足労願い、彼女の見識を分かち合って戴きました。ニコラ・バレの叡知の泉から学び、キリストの生き方に最も深い動機づけを見出し、この黙想は豊かさを得ました。

350 年に渡る歴史をふり返り“神の愛を人々に”という源泉に常に結ばれていたいという私達の大きな願望を一人一人が感じ得ました。この源泉にこそ私達の世界が必要としている全てを見出せるのです。

350 周年記念行事は 10 月 20 日 Sr. リディ・ンゴノの終生誓願式をもって終了しました。前日、夕べの祈りの間、カメルーン出身初の Sr. ブリジットとマルティンを想い起こしました。すでに父の御国に入られ、生涯を捧げて私達の準管区の歴史に特別な足跡を残された方々です。

Sr.ブリジット(右上)を指導者に、カメルーン準管区の黙想会

Sr. リディー・ンゴノの両親、友人、信徒協働者、そして生徒達は夕べの祈りに集まり、シスターの召命のいきさつに耳を傾

け、シスターと歩みを共にし、祈りによって支えたのでした。オバラの司教 ソステーヌ・レオポルド・バイエミ司式による終生誓願式は翌日のミサの中で祝われました。参列者にとって簡素で深みがあり、祈りに満ちた感動的な式でした。この特に喜ばしい年に際して、リディの誓約の言葉ばかりでなく、主に奉納されたシンボルにも霊的奉献の美しさを読み取ることができました。大地は修道会を象徴し、その基は陶工である主の御手にある土くれのようでした。歴史を見ると、主は望まれた通りに形造られました。実り多い木は 1662 年に蒔かれた種を表し、その木は巨大な木に成長し、枝の元には尊厳を傷つけられた多くの人々が安らぎを得ているのです。掲げられた旗は、修道会のカリスマを展開する 15 ヶ国と“精神・心・使命の一致”の内にシスター達全員と分かち合って生きる願望を表しています。“この足跡”は神への全き信頼と献身と共に未知の旅を行く女性の弟子達・巡礼者を表しています。この式に出席したナイジェリア出身のシスター達は文化の相違を認め、同じ道を共に歩み、相互に高め合いたいと言明しました。

リディ、終生誓願宣立(10 月 20 日)

ニコラ・バレの精神を貫く 350 年のミッション、350 年の愛は何と喜ばしいことでしょう！

(写真)　１．ソモの洗礼者聖ヨハネ教会で終生誓願を宣立するリディ。
２．司教ソステーヌ、リディの指に指輪をはめる。
３．お祝いのため、エクヌから参加し行列に加わってケーキを運ぶ聖歌隊のメンバー。

4． 宣教 350 周年と終生誓願宣立を祝い、ケーキを運ぶニコラ・バレ保健センターのスタッフ。

マケネネからの“ニコラ・バレの友”、現在はヤウンデで病院となったニコラ・バレ・カトリック保健センターの看護、ケアスタッフ、ソモにある EDAN（聴覚障害者の学校）の子供達、フンドンやサーから足を運んで下さった多数の信者の方々の参加は、幼きイエス会のシスターである喜びを増大させて下さいました。写生、ダンス、詩などの才能豊かな表現を通して神の愛の偉大さを私達のミッションの驚異を再発見しました。

この祝典は私達の歴史に末永く記憶されるでしょう。一人一人が新たに社会のニーズに再び目を向け、それに応える新しい方策を模索するという深遠な動機づけを再考察したいという気持ちになりました。

350 年もの間、働き、愛し続けられた事を、神に感謝申し上げます。

オルタンス・チュアタ・ドクトゥコ IJS

“我が愛する御方を探し求めて”

私は幼い頃から“神様に出会うこと”が夢でした。片言の祈りを唱えられるようになると、“雅歌”にあるこのくだりが自分の望むところになりました。幼きイエス会に入会した時、いつも“何故、修道生活を選びましたか？”と尋ねられましたが、“私は神様と出会いたいのです”と繰り返し答えるばかりでした。

式の中で、女の子の足を洗うマリ・ベルトィユ

御言葉は私の行く道の光であり、人生の方向を示して下さいました。修練期に聖人伝を学び、行くべき道を私に示して下さった聖人に出会いました。それは“幼きイエスのテレーズ”でした。彼女は私が抱いた同じ望みに身を委ね、同じ言葉で語っておられます。この事は私を幸せで満たし、“主のお顔を仰ぎ求める”気持を強め、私の望みは異例でない事が判りました。

しかし、“主をどこで探し求めたらよいのか？”という問いが残ったのでした。この問いに解答が得られず、絶えず悩んでいた私は、ある日気づきました。私の側に居る、見捨てられた人々の中に、すでに主を見ていたのです。神はその人々を通して私に語りかけておられたのです。共に居ることができる大きな喜びを味わっていました。それからは可能な限り、心の底から彼らの声に耳を傾けることにしました。愛をもって、心を尽くして。

2012 年 10 月 6 日、Sr. オルタンスと私に大きな恵みが与えられました。それは“神に出会う”ばかりでなく、奉献を通して自分自身を捧げる恵みでした。私達がこの日のために選んだ聖句(雅歌 3：1～4　コロサイ 3：14～24　ヨハネ 13：1～15)は、私達二人が全身全霊、神のものと感じられる願望を表していました。この聖句を通して愛と奉仕に基づいた信仰生活を築き上げる願望を言葉で表わすことができました。それはそれは、素晴らしい一日でした。私達は愛する御方に身を委ねることができたのです。

私達が心の底から親しく感じる神の愛に結ばれた事をこの度、公けにできました。ミサ中、白い衣に身を包み、この無比の聖なる結びつきを実感し確認しました。召命をうけ、“貧しく小さき人々”と共に考えることで、この社会の現実をしっかりと見るようにと、二人で与えられた証しでした。それは、私達がお役に立つ可能性のしるしであり、主がお示しになる人々の中に主を見出し受け入れたいというしるしでもありました。

足を洗った後、その女の子を抱くオルタンス

子供や若者たちの足を洗うことで奉仕に身をささげたいという燃える心を表わすために 福音の一節を体現しました。社会的に見捨てられた人々の中に、私達のキリストへの愛を示し、生涯　繰返し行うよう求められている奉仕のあり方です。

準管区の全ての者が恵みに満たされ、全てのシスター方が魂の喜びを味わう日になった事を確認しています。皆の顔には 歩み始める私達を支えたいという気持ちが読みとれました。家族や喜び踊る天使のような子供達に囲まれました。

日々の主の驚くべき御業や私達の先輩シスター方が共に居て下さることを神に感謝し続けています。愛しい御方が見守り、日々共に歩んで下さることに気づいています。私達 弱き者を主に委ね、忠誠の恵みを与えて戴くよう祈ります。

マリ・ベルトウイユ・エロガ　IJS

ナイジェリア

祝いが重なった月

ナイジェリアの IJ シスターにとって、２０１２年の１２月は意味深いイベントが重なった月だった。１２月２８日には会の宣教３５０周年とシスター・フィディア・ゴオンとシスター・リタ・シュメンの終生誓願式が行われた。

祝典はジャリンゴに新しく建てられたカテドラルで行われ、たくさんの参列者があった。３人の司教様がいろいろの教区のたくさんの神父様方と共誦ミサをしてくださった。いろいろの会の修道者、終生誓願者達の家族や友人がとても多く集まってくれた。

ミサ後、会が経営する学校の児童や生徒達始め、地域特有の楽器を手にした伝統的踊り手達も腕前を披露して参列者を楽しませてくれた。

こんなにも大勢の人を引き付けた祝典は、創立者ニコラ・バレ師を多くの人に知らせる機会でもあり、祝典の朗読の中には、バレ師の格言の幾つかが入っていた。

終生誓願式という喜ばしい祝いに参加する為アイルランドから来てくださったシスター・ガーテい・レイローを迎えて私達は大喜び。彼女がナイジェリアに滞在していた時に知っていた人達も、またシスターに会えてとても喜んだ。

５人のカメルーンのシスターがこの式に参列するために、長く、困難な旅をしてきてくれたことは、私達全員にとって一致と友情と支えの大きなしるしとなった。ナイジェリア地区とカメルーン準管区の間に新たな友情と協力が生まれ、強まっていくのが感じられたので、２，３日ではあっても、彼女達を迎えることが出来てよかった。それはアフリカの現実にとって、未来への希望のしるしであった。

レベッカ・オデュ IJS

幼きイエス会全管区の名前を携えての行列

誓願式のミサー福音書を運ぶ行列

フィデリアとリタ：修道院でのお祝いの幕開け

ニコラ・バレ学院(ガニエ)の生徒によるダンス

「女性の希望」

毎年１月にジャリンゴのマヨ・ダッサにある職業訓練センター「女性の希望」は、２年間の訓練プログラムを始める新入生に門を開く。センターは，学校をおちこぼれた人や、いろいろの事情で一度も学校に行ったことのない、恵まれない若い女性の世話をしている。彼女達は教区の最も孤立していて、忘れ去られたような地域から来ており、異なった種族の出で、異なった信仰を持っている。

“幼きイエス会のシスターとして自分の国のこの若い女性たちの人間開発に従事できることは、私達にとって光栄だと思っている・・・。”

シスター・アントニアとシスター・グレイスという二人の若い邦人シスターがセンターを経営しており、少女達に料理、裁縫、英語、数学、ハウサ語（地元の言語）コンピューター技術、農業（どの土壌にどの作物を植えるかなどのアドバイス）保健衛生(HIV を含む)を教え、少女達が人間的、霊的に成長し、自尊心を育てるのを助けている。裁縫の授業をとっている生徒で、上手に出来る者には、プロジェクトの予算が許す限り、プログラムの終わりにミシンが与えられる。プログラムの目的は少女達が村に帰った時に、自活出来、家族を養えるような技術を身に着けさせることである。

上　にあるマヨ・ダッサ(ジャリンゴ)の「希望の女性」訓練センターでの識字教室

下　「女性の希望」訓練センターでの編み物教室

私達 IJ シスターはこの数年間、教区と一緒になって、恵まれない少女たちに必要とされているものを与えるため、いつでもセンターの戸を開けているようにしてきた。過去何年間、センターには４０人から５０人の寄宿生がいたが、驚いたことに、今年は７３人に増えた。もっと多くの少女達がセンターに来たがっているので、この生徒数はこれからも増え続けるものと思われる。それはここで学んだ生徒たちが受けた恩恵や、彼女達が身に着けた人間的、実用的技術を見たからである。

学生の数が多くなれば又問題も出てくる。しかし私達は理由が何であれ、正規の学校教育を受ける機会を与えられなかったこの若い女性達が自分を向上させよう、村に帰った時に将来の為に役立つ何かの技を身に着けようと、村から、貧困から出て来始めたことを嬉しく思っている。

IJ シスターとして、私達は自分の国のこの若い女性達の人間開発に参与し、彼女たちが自分の尊厳を自覚するのを助けられることを名誉だと思っている。

センターに登録する女性の数が増え続けるにつれ、私達は「人間の神の似姿への成長に参与する.」(会の書　1)よう益々励まされるのを感じる。

グレース・シラカス IJS

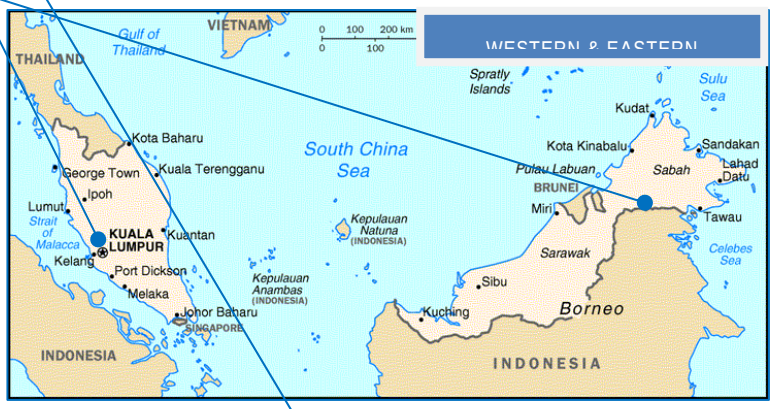
Asia

アジア

Turkey
Georgia
Armenia
Azerbaijan
Iraq
Kazakhstan
Uzbekistan
Turkmenistan
Kyrgyzstan
Tajikistan
Iran
Afghanistan
Pakistan
UAE
Saudi Arabia
Oman
Mongolia
North Korea
South Korea
Sea of Japan
Japan
East China Sea
China
Taiwan
Nepal
Bhutan
India
Bangladesh
Myanmar
Laos
Thailand
Cambodia
Vietnam
Philippine Sea
South China Sea
Philippines
Arabian Sea
Bay of Bengal
Andaman Sea
Sri Lanka
Maldives
Brunei
Malaysia
Singapore
Indonesia
Indian Ocean
ASIA

CHINA
RUSSIA
Hokkaido
Sapporo
Occupied by the Soviet Union in 1945, administered by RUSSIA, claimed by JAPAN.
NORTH KOREA
Sea of Japan
Akita
Sendai
SOUTH KOREA
Honshu
TOKYO
Korea Strait
Kōbe
Nagoya
Ōsaka
Fukuoka
Kitakyūshū
Shikoku
Kyushu
North Pacific Ocean
East China Sea
Philippine Sea
Okinawa
JAPAN

Woodlands
Seletar
Changi
Jurong
Bedok
SINGAPORE
Sentosa
Singapore Strait
INDONESIA


VIETNAM
Gulf of Thailand
THAILAND
Spratly Islands
Sulu Sea
Kudat
Kota Baharu
Kota Kinabalu
Sandakan
South China Sea
George Town
Kuala Terengganu
Pulau Labuan
Sabah
Lahad Datu
Ipoh
BRUNEI
Miri
Tawau
Lumut
Strait of Malacca
KUALA LUMPUR
Kuantan
Kepulauan Natuna (INDONESIA)
Sarawak
Celebes Sea
Kelang
Port Dickson
Melaka
Kepulauan Anambas (INDONESIA)
Sibu
Kuching
Borneo
Johor Baharu
SINGAPORE
INDONESIA
INDONESIA

MYANMAR
Hkakabo Razi (5889m)
INDIA
CHINA
BANGLADESH
Mekong Ry
Bagan
Mandalay
Kengtung (Kyaingtong)
Mrauk U (Myohaung)
Hehe
Taunggyi
Inle Lake
LAOS
Bay of Bengal
Pyay (Prome)
Taungoo
Bago (Pega)
Pathein (Bassein)
Thaton
0 200 km
0 120 miles
Yangon (Rangoon)
Mawlamyine (Moulmein)
Three Pagodas Pass
Mouth of the Ayeyarwady
Andaman Islands (INDIA)
Myeik Archipelago
Myeik
ANDAMAN SEA
Gulf of Thailand

Chiang Rai
Doi Ithanon (2590m)
LAOS
VIETNAM
Chiang Mai
Lampang
Vientiane
Gulf of Tonkin
MYANMAR (BURMA)
Yangon (Rangoon)
Sukhothai
Udon Thani
Mae Sot
Mekong River
0 200 km
0 120 miles
Ayuthaya
Prasat Hin Khao Phanom Rung Historical Park
Nakhon Pathom
Chachoengsao
Bangkok
Si Racha
Ko Si Chang
CAMBODIA
Andaman Sea
Ko Samet
Phnom Penh
VIETNAM
Gulf of Thailand
Ho Chi Minh City (Saigon)
Ko Pha-Ngan
Ko Samui
INDIAN OCEAN
Phuket
Krabi
Songkhla
Thaleh Ban National Park
Hat Yai
MALAYSIA

日　本

ミッション 350 年…いのちの流れ…

幼きイエス会の宣教 350 周年を管区として祝う動きを始めて以来､長い時間が経ったような気がいたします。2012 年 5 月にはミッション開始 350 年の記念集会が開催され、私たちは新しい力、大きな希望、感嘆・感謝するこころをいただきました。フランスからは会の古文書室長、シスター　エリザベス・ソンタグと、マザー　マチルドのご親戚でいらっしゃるペラール神父様がご出席くださり、この記念集会が特別に意味あるものとなりました。ペラール神父様は、マザー　マチルドがそうだったように長い間、日本で宣教活動を続　　ペラール神父様と Sr.エリザベス
けておられます。ペラール神父様の司式で特別な感謝のミサが捧げられました。集会もシスター　エリザベスが参加してくださったことで、大変豊かなものとなりました。シスターはパリの母院の現在と将来、会の歴史について、いろいろな話や経験を分かち合ってくださいました。

2012 年 10 月 16 日：Sr.トマの講話

2012 年 10 月　ニコラ・バレ　ハウスに於いてミッション 350 年記念行事を開いた。
7 月頃、交通の便のいいここで何か出来るか、シスター3 人、信徒 2 人で話し合った。
先ず、四谷＝雙葉・サンモール、ニコラ・バレ＝建物の名前と思っている人々、幼きイエス会の聖心をよく知らない人々に、350 年も脈々と伝わっている**いのちの泉**　を知らせたい。そして、世界の幼きイエス会の姉妹たちは現代社会の中でどのようにミッションを生き、創立者の精神を引き継いでいるかを紹介したい。では何時、どのように…と｣話しは発展し、**第 1 部はニコラ・バレ神父の紹介、第 2 部は 350 年の歩みの展示(20 日間)と決めた。**

まずチラシづくり、そして配布。雙葉学園の卒業生、各コミノテを通して姉妹校関係など、また麹町聖イグナチオ教会、ＳＪハウス、東京教区報など、宣伝に弱い私たちには珍しくあちこち配った。

10 月 16 日　９Ｆホールに 160 余名の老若男女、いろいろな方が集まってくださった中、Ｓｒ．トマ島田によるニコラ・バレ神父についての話。更に、350 年前の聖霊の光は現代も同じく働きかけ、アジアのみならず、アフリカ、南米、東欧にもミッションが広がっていることを紹介して終わった。次に、ちょうど日本に滞在中のＳｒ．深堀が、３管区協働ミッションのミャンマーの状況をスライドを使って説明。その導入にオリンピックランナーになったＳｒ．メリ・ジョイの姿やポニーセンターの

紹介もし、参加者たちはシスターたちの開かれた宣教を驚きの目で見聞きしていた。

写真展：350 年の歩み–フランスでの宣教.

第 2 部は「ミッション 350 年の歩み」として 10 月 11 日から 29 日まで、１Ｆの玄関・廊下の壁面に所狭しと、創立者ニコラ・バレについて、フランスの宣教、そして世界に向けての宣教についての説明文や写真が展示された。最期の第Ⅳ面は「日本」 来日当時の説明、各学校、様々な宣教の姿など、偏った資料からではあったが、壁面いっぱいに展示された。

聖霊に押し出されて始めた行事が、多くの方々の心に響いた霊の働きに、賛美と感謝を捧げつつ、また創立者の話しや、展示を見に来られたり、感想を書いてくださった方々、また共に作業をしてくださったメンバ
ー、全ての方々に、喜びと感謝をもって報告とする。

マリ・ピア・朝日 IJS
ニコラ・バレ　ハウス(東京)

長崎・ミッション開始 350 年記念の集い

な宣教開始 350 年記念の年の取り組みの中で、信徒・先生方対象の集いを福岡で出来ないだろうかという案が検討されていました。福岡・長崎の先生方に呼びかけると、皆、大賛成でした。

以前、聖マリア学院では、「ニコラ・バレ神父の取次を願う祈りのグループ」がありましたが、彼らは、この知らせの後、その祈りの集いを再開して待っていました。

長崎での集い：懐かしい顔ぶれ
(前列左から) Sr.古賀、中浜師、Sr.金公女

年も押し迫って、12 月 2 日（待降節第一主日）に、長崎の信徒の先生宅で、ささやかな集い　　が行われました。参加者は、スタッフの金公女、古賀勢子を含め、12 名でした。信徒の先生宅で和やかな雰囲気のうちに始まりました。

集いの流れは、近況を兼ねた自己紹介から始まりましたが、ここですでに盛り上がり、皆　　ざっくばらんに話してくださったので、すぐに打ち解けました。メインは、会の歴史をパンフレットも使いながら(共同体の誕生、宣教の流れ)あらましを話し、次にバレ神父さまの精神の大切なところを話しました。

12 時半より中浜神父様によるミサが、テーブルを囲んで捧げられ、山本さんが、ミサの歌をリードしてくださいました。とても良い、家庭ミサでした。

ミサ後昼食に入り、引き続き、近況や、これからの課題などの分かち合いがおこなわれました。
最後に、各自の意向を入れながらバレ神父様の取次を願って祈りました。「今後もこのような祈りと分かち合いの集まりがまた出来たらいいね。」という感想でした。

ありがとう、シスター・ポーリン

クリームをホイップする Sr.ポーリン

シスター･ポーリン田崎アキノが 2012 年 11 月 29 日に 99 歳で帰天されました。
シスターは 1912 年、福島県の白河で 7 人姉弟妹の 2 番目として生まれ、1939 年に横浜紅蘭で受洗、1941 年に幼きイエス会に入会されました。初誓願後六番町に移り、そこで洋裁や手芸、料理に精を出し、特にバザーの時のクッキーやケーキは大好評でした。

80 歳でガリラヤ修道院に移ってからは、デイ・サービスやショート・ステイを利用するようになりました。次第に施設の職員やディ・サービスの仲間など親しい
方々も増え、多くの行事に積極的に参加していましたが、ボーリングと絵画をとりわけ楽しんでいたようです。

絵を指導してくださるボランティアの先生によれば、「シスター・ポーリンの描いた絵には 100 歳とは思えない力強さがあり、その“詩”には人の心を感動させるものがある」とのことでした。

100 歳の誕生日を前にして、まさかの“突然の死”に私どもコミノテ・メンバーは本当に驚きました。
でも神様のご計画は“シスターをもっと素晴らしい宴席に招くこと”だったのでしょう。

シスター・ポーリン、長い間ほんとうにありがとう！

ガリラヤ修道院（東京）

脱原発デモに参加したこと

毎週金曜日に国会議事堂周辺で行われている脱原発デモに参加したいと以前から思っていました。テレビでしか国会議事堂を知らない私ですが、Sr.松本が、Sr.印を案内人にして下さったので、10 月 28 日に出かけました。５時半頃でした。丸ノ内線の国会議事堂前で降りると人々が道路側の石垣に座っていました。仲間入りして座っていると、次々にいろいろな人がやって

来ます。小さいシャツに子供を守れと書いて棒に掲げる人、母子の絵を描いて命を守れと掲げている女性。隣に座った中年の婦人に、いつもこれくらいの人数ですかと声をかけてみました。
するとその方は、今にもっと増えるでしょうが、私は人数を気にしません。埼玉から毎週来ているのですが、来なければと思って来るのです。今は楽になりましたが、夏は暑くて大変でした、とのこと。遠方からずっと来ている方なのだと、頭が下がりました。寒くなるとまた大変でしょう。６時になると、勤め帰りらしい若い人々も増えて、歩道いっぱいになって来ました。マイクが「原発反対」と叫ぶと、皆が一斉にチャッチャチャと拍手しながら、「原発反対」「再稼働反対」「再稼働反対」「命を守れ」「命を守れ」「子供を守れ」「大飯をやめろ」「大飯をやめろ」「大間作るな」「大間作るな」。チャッチャチャの拍手だけでなく、カスタネットをたたく人、笛を吹く人、ラッパで呼応する人、それぞれ工夫を凝らして、議事堂に向かってシュプレヒコールを繰り返します。その間に３回くらい短い演説が入ります。女性の方が、「子供たちが検査を受けます。どうしてこの子たちが検査を受けなければならないのか」と泣き声で訴えられたのが心に残りました。放射能検査のことでしょう。皆さんに交じって私も声をあげましたが、議事堂の人々に、政治家たちには、声は届くのでしょうか？

すっかり暗くなり少し冷えて来て、Sr.印が私の身を案じて下さったので、２時間足らずの参加で、心残りでしたが引き揚げました。静岡に帰っても、毎金曜日この方たちと心で連帯しようと思ったものでした。

オディール・山本 IJS(静岡)

反原発デモ―2013 年月 9 日の報道から―.

デモ隊、警察とぶつかる(2013.3.9 のデモ)

プラカードを持ち、シュプレヒコールをする。

ノーベル賞受賞者、大江健三郎氏の姿も見える。

デモ行進の前に祈るデモの参加者たち

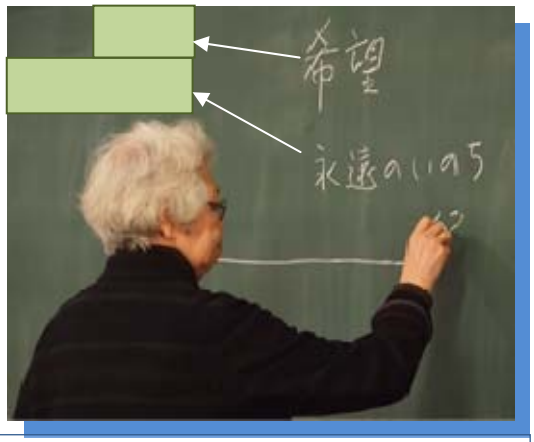
福島の呼びかけに応えて

古賀綾子

東日本大震災が起こった翌年の５月、福島を訪れる機会があり、旧友のシスターに会うため、市内にあるコングレガシオン・ド・ノートルダム（CND）修道院を訪れた。ここには幼・小・中・高・短期大学があり、それに付属する生涯学習センターがあった。彼女はそこのセンター長をしておられる。

震災後、学校、修道院をあげていろいろな取り組みをしておられるが、彼女は、１年を経て今最も必要とされているのは、被災された人々の心のケアの問題ではないかと考えられた。被災者が、あの時起こった出来事やその後の不安など、心に抱えている問題を自分のことばで語り始めるのを聴くことこそ、前向きに生きる一歩の手助けになるのではないかと。

熱心に耳を傾ける聴講生の皆さん



板書しながら説明する Sr.ローズ・古賀

そこで、生涯学習センターにおいて、無料の「傾聴ボランティア講座」を開催し、傾聴ボランティアの養成に踏み切った。30 人の募集に３倍もの応募があり、ニードの高さに驚いた。急遽２クラスを作り、５月から春コースとして出発、90 名の研修が始まった。専門家の助けを借り、養成チームを作って、これに当たっている。さらに秋コース 20 数名、５か月間の研修を終え、認定証を得て、いろいろな現場でボランティアとしての活動が始まった。この４月（2013 年）から、３回目の講座が始まる予定である。

そんなわけで､ちょうど福島を訪れた私にも､スタッフとして手伝う気はないかとの声がかかった。かねがね、何か被災された方々のお役に立つことはないかと祈り探していたときでもあったので、管区チームの了解を得て、参加させて頂くことになり、現在に至っている。

東京でもいくつかの講座を持っているため、月の前半は福島で、後半は東京に戻る生活である。幸いに福島では CND の修道院の一室を提供してくださり、祈りと生活を共にさせていただいている。これも貴重な体験で、温かく開かれた雰囲気でシンプルに受け入れて下さっていることにとても感謝している。

活動を始めて、いろいろな課題に直面している。研修を終えたボランティアの派遣先、振り返りの方法や頻度、ピアサポート、スーパービジョンなど、行動し、歩みながら整えていくしかない。「聖霊の働きを当てにして従いましょう」は、私たちの合言葉である。

課題は課題として、私の心の中にも変化が起こった。研修生自身が、会を重ねるごとに変わっていくのである。明るくなり、生き生きと前向きな姿勢が目に見えて感じられるようになった。この人たち自身が変わるということは、すでにその家族、友人、周囲の人々に影響を及ぼしていることになる。100 名近い参加者が、福音を聴いたことになる。そう気がついたとき、肩の荷が下り、枠がはずされたのを感じて、導きを感謝した。それは彼らを通して頂いた恵みである。

付け加えるなら、被災地の中でも福島は、原発による放射能の影響に苦しんでいる。特に、子どもを持つ親たちの不安は、私たちの想像以上に大きい。そして子どもたちは、二次被害（間接的）―外で遊べない、運動が十分できないことからくる肥満、ストレス、将来への不安など―に緊張感はつのる一方。いつ終わるとも知れない、見えない敵と戦っている状態が、今も続いている。

ここで暮らす人々の苦悩は、明日の私たち、人類全体の問題ではないだろうか。原子力発電に対する今の私たちの態度決定が迫られているのを感じる。

2013 年 3 月 11 日　2 時 46 分

黙祷を捧げる福島の集会参加者たち

マレーシア

３５０周年と１６０周年の式典

１０月２１日(日)マレー半島とマレーシアにある幼きイエス会のシスターの達はクアラルンプールにある有名な丘の上の修道院に集まって、信徒準会員、協力者、友人たちと一緒に主日のミサに与かり、３世紀以上に亙っての世界の宣教と、マレーシアでの１６０年の宣教を通して、葛藤、苦しみ、喜びのさなかで彼女らを育て、支えてくれた神の忠実さと大きな愛に感謝した。セレンバンのカンプン･バシールにある IJ 学習センターを通して宣教活動に関わっている訪問会共同体のセレンバン教会から３０人以上の準会員，宣教協力赦や友人が参加した。

ミサが始まる前の１０分間、会の歴史、特にマレーシアについてのビデオがあった。最初のシスターがマレーシアに到着した時，マレーシアはあらゆる意味で第三世界の国だった。イギリスの支配下にあって、経済が教育に優先していた。これは初代のシスター方の事業がどんなに大変なものであったかを表している。開発が進むにつれ、数と需要が増加した。政府の認可及びシスター達、保護者、生徒、寛大な恩人たちの最大限の協力によって初めて進展することが出来た。これらすべてを支えていたのは、シスター達の疲れを知らぬ献身と注目に値する犠牲であった。彼女達はリーダーシップを発揮し、第一次、第二次世界大戦に直面してもその信仰は揺らぐことがなかった。彼女達の遺産は、数えきれない程の卒業生、政治家、企業家や主婦、そして目立たない行商人の生活の中に生き続けている。先輩に見倣って IJ シスターとして修道院に入った地元のシスター達は今、現地でバレ師のミッションに全面的に参加してくれる協力者を求めている。

１０時半のミサは名誉大司教アントニー・ソター・フェルナンデズ師(中央でカズラ着用)ジュリアン・レオ師、ロビン・アンドリュウ師(左から１人目，２人目)訪問教会の助任アルビン･ホー師(右端)による共誦ミサだった。クアラルンプール大司教のマーフィー・パーキアム師(右から２番目)は教区の教会で堅信式の司式をなさ

っていたため表敬訪問をしてくださった。

３００人を超える会衆が聖堂とトリビューンに一杯になり、聖堂の外のピロテイーにまではみ出していた。車椅子の７人のシスターは祭壇前の名誉席を占めていた。

お説教の中で大司教様はシスター達との付き合いが長いことや、貧しい人がいるところはどこでもシスター達が学校教育や司牧活動に関わっており、特に社会から望まれていない少女達についての事業に感銘を受けたと述べられた。シスター達は責任のある親がするように少女達の面倒を見ていた.今、成人し社会で活躍している彼女達は、シスター達の素晴らしい仕事の証しである。ミサ後のお祝いの食事の前に、IJ 管区長のシスター・セリンが初代のシスター達の功績を称え、それに次いでヨーロッパ人宣教女に賛辞を呈した。彼女らの疲れを知らぬ献身、子供たちに対する愛、神のみ国を広げようとの熱誠、そしてマレーシアの宣教の為に何十年もの生涯を与えようという決意が永続的な実を結んだのだ。私達は今日、神の忠実さ、シスター達の忠実さ、そして恩人たちの寛大さを祝っている。過去と現在のボランティアと協力者に、心からの感謝を表したい。彼らの助けがなければ私達の祝いは完全にならないだろう。

チェラスのＩＪ宣教記念の祝いでは、シスター・ベアトリス、シスター・マリ・テレーズとシスター・レオングが誓願宣立６０年を、そしてシスター・アグネス・ヌグが金祝を祝った・私達は世界のＩＪシスターの３５０周年とマレーシアの１６０周年を感謝している。

「主よ、栄光は私達ではなく、あなたのもの」

同様の祝いが１０月３１日にメラカのタマン・バクティで、１１月１１日にイポーで、１１月２４日にシティアワンで、１２月１日にクアラルンプールのブキト・ナナスであった。(これは特に修道院で育った人たちの為)こうした分散した祝いは地方のＩＪ共同体、準会員、近くの教会の人達を私達の使命・ビジョンに参加させ、分かち合わせる機会となる。それは神の国の建設という普遍的教会にとって欠かせないものである。

管区総会の感想

管区総会の出席者

４日間の総会は、私達を大雑把なロードマップが与えられた６年前に連れ戻した。その同じ６年の間に、詳細が徐々に詳しく説明され、私達が明日の IJ を産み出す助産婦であり、又巡礼者でもあることを想起させた。グループに分かれて個人、共同体、国家そして世界的現実とチャレンジについて話し合ったときには、とても活発な意見が出された。第二バチカン公会議後になって、それまで知らなかった領域に進出した個人と小グループの代表が体験を分かち合って
くれたが、これは私達ミッションの主流に留まっていた者たちの視野を広げるのに役立った。恐らくこれらは修道生活が正規の教育とか孤児の世話というような従来の事業とは別のものとして再定義される未来への道を開いているだろう。

総会の雰囲気は、初めはためらいがちだったが、次第にみ摂理への信頼へと移って行った。この動きに沿ってのキーワードは「協力」「証人」「預言的」そして「行く行くは」に含まれている。これらの語は希望と保障を意味していた。「行く行くは」という語の持つ時間的聖約のヒントは、未来の確かさを示していて、メンバーはその目的に向けて必要な手段を講じなければならない。いくつかの小グループの話し合いの中では、恒例か、会員数の減少、Aids、人身売買、
権力の濫用と経済力を絶えず追い求めている世の中には､いつももっと急を要する問題があるだろう。

私達の今の存在の在り方と関わり方は、これからも意味を持ち続けるだろうか？共同生活と IJ 修道会の構造についてはどうか？これらはそのうちに変えなければならないのか？
総会は全員が満場一致でビジョン・ミッションの声明を受け入れることで閉会した。私達が 160 年間マレーシアでして来たことは、こんなにも長く続いたのだから、確かに私達の仕事ではなく、神のみ業であった。総会の終わりに一人の代表者が言ったように「私達のコミノテでの問題はとても小さく、取るに足らないものに見える。少なくとも私達は今、前に進むことが出来る…ひとりではないのだから。」

アンヌ・ウォン IJS

ミャンマー

ミャンマーにおけるミッションを 4 部に分けてお知らせします。

“ミャンマーにおける修練期の旅路”

昨年 12 月、ドゥアンジェット・ソンチャイパンヤ(タイ)、メアリー・トゥザール・ルウインとジョセフィン・ケイ・ティ・ウー(ミャンマー)は、Sr. ヌンパの指導のもとノビスとしての歩み始めました。タイと同様、ヤンゴンで一年、共に生活し、各々のニーズに合わせて準備する機会が与えられ、次のステップを歩み出すことになりました。

1 月、ヤンゴンで開かれた
ミャンマー宣教会議の出席者
前列、左から 3 人目が、ファシリテーターの
キャサリン・ジーニー

未踏の道であり、歴史的変革の期にヤンゴンでの修練を行なう決定をし、若いシスター達には、この国の変わりゆく現実と挑戦に関与していく事と、異なる文化を体験し、英語を学習する機会をドゥアンジットに与えることを確認しました。“新しいぶどう酒”が“新しい皮袋”の中で熟成していくように。

12 月 15 日に開催されたレセプションには、メアリーとジョセフィンの家族、ヤンゴンの幼きイエス会の親しい友人達が参加しました。開催場所はマイル通り 7 番地にある幼きイエス会の修道院でした。今は修練院になっています。モンテッソリーの幼稚園は、毎朝続けているのでグレイスとジャシンタは修練者が以前住んでいたアパートに移転しました。ミャンマー宣教ティームは、目下、幼稚園教師養成センター、修道院、修道者および信徒のリーダーを養成するための施設用地を確保しようとしていますが、繁雑な手続きを経なければならず、歩みは遅々としています。

読書好きであること、困難な時も読書で支えられたと話すスーチーさん.

“祖国の魂を再び燃え上がらせる”

2013 年 2 月、ミャンマーは 1 週間に渡って第 1 回イラワディー文学フェスティバルが開催されました。これは、この国の変革が経験する他の試みに比べると群を抜いているものでした。例えば 6 万台もの新車が街に溢れたのです。

週末のハイライトは疑いもなく、アウン・サン・スーチ

ーの登場でした。母親によって育まれ、自宅軟禁の日々、自らを支えてくれた書籍への愛着と結びつきについて語りました。

会場の席取りに並んだ長い列は数マイルにも及びました。ビルマ人ばかりでなく世界中から集まった人々は“この婦人”の講演に耳を傾けたかったのです。ローズマリー・バーター、テレサ・サンサナムと姉妹、グレイスとジャシンタは幸いにもその会場に入ることができました。

文学フェスティバル会場での昼食

淡々と語るダウ・スー（こう呼ばれることもあります)の態度からは賢明さが伝わってきました。若い頃の読書は世界への窓を広げ、くり拡げられる人生の困難を受け入れる心の準備に役立ったのでしょう。だからこそ誰も、何事をも彼女を驚かせることがなかっと語るのです。
殊にダウ・スーは“レ・ミゼラブル”を常に好んで読み、彼女の精神力を育む感動を与えたとも語りました。

フェスティバル・フォーラム・パネルディスカッションにおいて著名な作家やコメンテーターが内外から参加し、恐れることなく心の中を語り、考えを述べ合うことができ、まさにこの国の魂を再び燃え上がらせたのです。一年前には、このような公開討論は想像もつきませんでした。

“追放者の帰還”

パスカル・コー・スウィーは 1988 年の学生峰起が勃発した折、ビルマ軍から逃亡して、昨年夏まで追放の身でした。これは彼にとって 2 度目の祖国訪問です。“グリーンゴーストの地から”は彼の置かれた窮状とビルマ国民のための戦いについて取り上げた著書です。その本は発行禁止となり、私達は再び彼に会えるとは思ってもいませんでした。

ジャシンタと話すパスカル・コー・スウィー

教職員教育研究所にパスカルを迎えることができ、彼の人生、体験、希望について率直に学生達と語り合う大切な時間を提供して下さいました。彼を英国に派遣した教授に対して彼は同胞を支

援するために必ず帰国すると約束しました。それは長い待機の時でした。この数年、色々な仕事に関わってきた彼は、より密接に母国に関わり、5 才以下の子供達の栄養問題に焦点を当てた“子供の健康”に取り組む計画であると語りました。庭仕事と料理に熱を入れている彼は、アッシジのフランシスコの精神がいかに常に彼を引きつけているかを語りました。

パスカルの故郷、南部シャン州出身の学生達は、英雄でありインスピレーションを与えてくれる人物に会うのを誇りとしました。彼等にとってパスカルは、文化と価値感が異なる社会の中を飛ぶ凧のようなイメージでした。1988 年以前に結ばれた家族や友人との絆は、この 20 年間 彼を強めたと語りました。静かに語る彼は患難を味わった人ではなく、霊的に深いものを持ち、全人類に向けた感謝と愛に満たされた人の姿でした。その朝、私達と共に姿を見せたパスカルは学生達の心を打ち、勇気と人生の方向性を与えて下さいました。

“ミャンマーでのミッションチーム集会”

寄宿舎で昼食を食べる子どもたち

12 年前に宣教を始めて以来、初めてミャンマー宣教チームはミャンマーで集会を開催する事が出来ました。18 ヶ月前の政変で全ての面で多大な変化が起こり、殊に外国人に対して より友好的な態度が見られるようになりました。

ミーティングは 1 月に行われ、セントラルチームからは Sr. 方子、そしてアジア管区の指導的立場にあるシスター達が参加しました。数ヶ月前にミャンマーを訪れ、私達といっしょに宣教活動に加わっていたアイルランドの Sr. ローズマリー・バーターがこの集まりに参加。アジア管区のシスター達もミャンマー宣教チームのミーティングの数日前に一同に会する機会に恵まれました。

僧院を訪問する幼きイエス会のシスターと友人たち.

参加者は主催者のおかげでミャンマーの厳しい日常生活を内側から見学することができました。寮の施設や仏教寺院を訪問しました。教会活動に従事している方々との対話は実り多く、パゴダ訪問や静かに祈る主日の礼拝は、これから長きに渡って私達の心に残るものとなるでしょう。

主な議題は、土地の調査、修練者の養成、そして教員養成に関する私達の役割でした。全参加者の意向と約束は Sr. キャサリン・ジーニーSSC

の指導を受けて、潜在的に困難な事項についても前向きに進める事ができました。殊に Sr. キャサリンの見事な司会・進行と聖霊の導きのもとでセントラルチームに、土地購入の提案を提出するという結論にまで到達することが出来ました。それ以降、この計画は進展しています。

宣教仲間

昼食を共に楽しむアジア管区のリーダーたち.

次年度のミーティングもミャンマーで開催される予定で、ここでの生活と宣教の異なる局面に関わる呼びかけを受けました。

ジャシンタ・カルドーサ
（ミャンマー宣教チーム）

シンガポール

キノコとたけのこ

いろいろな使徒職の場を体験するということでタイに行ったのですが、私にとってタイ訪問は初めてのことではありません。2009 年、タイ北部のウィアン・ケンで少数民族の子どもたちと生活を共にする特別な機会をいただきました。しかし今回は、バンコックで若い会員のための集まりに参加することも計画されていました。このような分かち合いに与かることが出来るようにしてくださった、シスターアグネスとシスタージェインの寛大な支援に感謝しています。

若い会員のための集まりはタイ語で行なわれたのですが、話されていることを理解するのに何の問題もありませんでした。心と心を結ぶことばは、どのような話しことばや書きことばよりも優れています。私たちは、マルグリット・レストックの手記、初代姉妹の署名入り文書、愛徳学校案内などの創立文書を考察し、考察したことを分かち合いました。これらの文書や現代世界に生きる人々の価値観の理解を深めるように言われました。社会が豊かになるに従い、道徳観や価値観は徐々に蝕まれています。ですから、私たちには福音に根ざした価値観を証しする必要があるのです。共同体生活の中で直面するいろいろな場面を演じたり、対立が起きた時の解決法を探す、とても楽しい時間がありました。集まりは修道生活の心理的・霊的側面に関するセッションで終わりました。この集まりは僅か 3 日間だけでしたが、非常に総合的、且つ助けになったと思います。私への“呼びかけ”は更に現実的なものとなり、確信は強められました。

集まりの後、チャイヤプンに行き、ノンマイナム、ノンヤロン、ケンクロで司牧活動を始めました。小さな子どもや生きる意味を探している大人を対象とした公教要理など、村の人々向けの活動を企画しました。最も新しいものの一つは“主婦クラブ”という活動です。この活動は、村の女性たちに霊的支援や、その他彼女たちが必要としている支援を提供することです。私たちは日々、新たな出来事やチャレンジに直面し、神に対する畏敬と感謝の念を新たにしたのでした。一日として同じ日はありませんでした。

夜明け、正確には朝 4 時に起床、キノコ、たけのこを採りに行きました。“おこわ”と一緒に食べる日々の糧です。私のような都会育ちには、山登りはきついのですが、意欲がかき立てられるものでもあります。途中、3 度も転び、とうとう頂上には辿りつけませんでした。神の現存を非常に強く感じる、身が震えるほどの経験でした。キノコやたけのこを採るのがどんなに大変なことかが少しは分かり、よく味わっていただくようになりました。村の人々やシスターたちの忍耐力と困苦欠乏に耐える我慢強さに励まされました。この経験は生きている限り、私の魂に刻み込まれ、消えることはないでしょう。特にキノコやたけのこをたべる時、このことを思うことでしょう。看護師としての知識(保健教育を含む)と看護技術を村の人たちに伝えるという特別な機会をいただきました。充実感を味わうこ

とが出来た体験でした。介護の賜物をくださった神に感謝。

貧困者を探し、支援することは、私たちが貧困者に“与える”ことであると考えるかもしれませんが、実際には、私たちと共に生活し、働いている人々の方が私たちよりもずっと多く与えています。私たちが彼らの生き方を変えるのではなく、むしろ彼らの方が私たちの生き方を変えてくれるのです。私が彼らから受けたことは、霊的生活をもっと深く味わうことと神が私たちを愛してくださるその愛の豊かさです。神が続けて私を強めてくださるよう祈ります。神の呼びかけを大切にし、宣教に派遣されることを受けとめ、神のみ旨に自分自身を明け渡すことが出来ますように。神に信頼し、従っていくことが出来ますように。神と人々に仕え、神の忠実、且つ誠実な働き人であり続けるために。

エリザベス・モエイ IJS

我ら“大家族”

福者ニコラ・バレがフランスで最初の学校を創立、その 350 年周年を祝う集いは、シンガポールの幼きイエス会の大きな学校共同体を一つに集めるよい機会となりました。

卒業生、修道院関係の方々が大勢参加し、この記念日を特別なものとしてくださったことで、信徒との協働が現実のものとなりました。意味あるイベントを中心にし、幼きイエス会の学校司牧、ホームを運営する際の推進力である価値観と信頼を再び掴み直そうということで、始めから全員の意見がまとまりました。

恵みの時間：生徒・先生が１時間、電気を使わずに過ごす。恵まれない人々と苦しみを共にす

生徒・子どもたちの意気込みを再び燃え上がらせ、私たちに託されている豊かな“遺産”を正しく理解し、深め、それを実際に生きられるようにしたいと考えました。生徒たちが自分から出て､意味ある人生､はっきりとした目的意識を持ち、奉仕する人生を送ることが出来るようになるため、生徒たちを勇気づけるようなイベントが企画されました。この１年のテーマは“**自分を越える、今を越える**”としました。

野外でのシェイクスピア劇

最初のイベントは、幼きイエス会の全校生の参加による体験学習でした。生徒たちは電気のありがたさを知り、大切に使う責任があることを、エクササイズを通して学びました。このイベントを **“恵みの時間”** と名づけ、熱帯にあるここシンガポールで正午から午後１時までの１時間を電気なしに過ごしました。この象徴的な体験は、学生たちにとって意味深いものであったと分かりました。電気が全くなかった

野外劇：始めの祈り(Ｓｒ．アグネ

り、あるいはまだ贅沢品と見做されている東南アジアの他の地域について学ぶ生活科の学習に結びついた時は、特にそうでした。

後半のイベントは、幼きイエス会の全学校が合同で、演劇“公園のシェイクスピア”を披露しました。学生たちが参加、演じることで演劇に対する興味が刺激されたことに加えて、保護者も子どもたちと一緒に来るように勧められました。このようにして、このイベントは家族、学校間がくつろいだ、開放的な環境の中でつながる素晴らしい機会となりました。一つである、結ばれていることが見える形で感じられ、人々は皆、喜びました。

“*女性－変化をもたらすもの－*”のテーマで、2012 年 9 月に行なわれたフォーラムには 800 人以上の生徒が招待されましたが、その中には小学校高学年の生徒も含まれていました。フォーラムに参加する前に、全学生はユーチューブ、その他のメディアを使って、女性たち―東南アジアの最貧国の女性たちまで―がどのようにして変化をもたらすかについて調べました。講演者は幼きイエス会の学校の卒業生で、女性のための正義と貧しい人たちの尊厳に関する訴訟の弁護士として注目されている方々です。このイベントでは、変化をもたらす人になる努力をした 12 歳の小学生にも登壇し、話すチャンスが与えられたのです。

Photography Exhibition: Guests

この年のハイライトは、2012 年 10 月 21 日に行なわれた*アガペの晩餐*でした。理事会のメンバー、校長、副校長、協働者、友人、シスターたちの家族が食事を共にしました。このイベントにはアロ神父(パリ・ミッション会)もおいでくださり、お祝いは大きな喜びで盛り上がりました。

2012 年の閉会のイベントは生徒たちの*写真展*でした。キャノン(株)が後援を引き受け、写真展が開催される前、生徒たちのために写真の撮り方のトレーニング･コースを開いてくれました。写真は全て、台紙に貼ったり、額に入れて装丁しました。展示会場には相応しい場所が選ばれ、保護者、友人も招待されました。受賞者を始め、多くの生徒たちはこの経験を通して、自分たちが住んでいる環境を正しく理解し、大切にするようになりました。この好機に、*記念写真集クィル(ＱＵＩＬＬ)*が出版される運びとなりました。才能に恵まれた同窓生が推進力となり、私たちの歴史、過去と現在を結ぶこのすばらしい写真集が出版されるようになったのです。

いくつかのイベントの企画を通して浮かび上がってきたことは、信徒の協働者、彼女たちのリーダーシップと寛大な心、そして何にも増して、彼女たちが私たちの学校で受けた教育を次に引き継ぐこと、生きていかなければならないと確信していることです。

アート・スタジオでの写真展（一部）

幼きイエス会の宣教 350 周年を記念する最後のイベントは、2013 年の行事、**2013 年 3 月 21 日・CHIJ ウォーク**に発展し

ていきます。このイベントは、　マリーナ・バラージュで開催予定の**“世界水の日・シンガポール　一滴の水も大切”**につながっています。現在、水資源保存のための研究が行なわれていますが、10,000人におよぶ参加者は、自分が一滴の水になるのを楽しみにしています。
これはこの最も大切な資源を大切にする上で、一人ひとりの人がいかに重要な役割を果たしているかを表わすシンボルです。

ディエードラ・オローン IJS

フィリピン宣教

2010年6月、私はフィリピン、アンティポロ市の“コゲオ”という村に参りました。コゲオは小さな村で、人々は自然に密着して生活し、たいへん素朴です。村には公立の小学校が2つあり、生徒数は8,000名以上。大多数は非常に貧しいカトリックの家庭の子どもたちです。

> “毎木曜日、
> ある一人の医師が提供してくれた
> ガレージに集合、
> 診察と薬を出す
> 無料の医療サービスを行なっています。”

私は現在、宗教科の教師としてプラーグの幼きイエス小教区に雇われています。小学6年生のキリスト教要理と価値観の教育を担当しています。この年代の子どもたちは無防備です。教師と親の指導が極めて重大です。私の1週間は次の通りです。月曜日：その週の授業の準備。火曜日・水曜日：2つの学校で宗教を教える。7コマ。1クラス　59名。木曜日：台風の被災者を支援している専門家のグループの集まりに参加。このグループは様々な分野の専門家、修道者、信徒が協力して立ち上げたグループで、共に集まり、恵まれない方たちを支援しています。

台風による洪水と地すべりで山が崩れ、多くの家屋が倒壊した時、この善意の人たちは台風の被災者、特に女性と子どもを支援することにしました。毎木曜日、ある一人の医師が提供してくれたガレージに集合、診察と薬を出す無料の医療サービスを行なっています。皆でロザリオの祈りをし、聖歌を歌います。そして私はキリスト教要理を教えます。教会の信徒がスナックを準備します。金曜日：要理担当者との祈りの集い。土曜日・日曜日：小教区内の家庭訪問。

子どもと女性たち。ネリッサ(中央)　医師(赤いブラウス着用)

子どもたちは栄養失調のため学業不振ですが、この善意の人々のおかげで、1年後には成績が上がりました。家族の絆は更に強くなり、子どもたちも勉強を頑張っています。

ネリッサ・ニコラソーラ IJS

タイ

特別な祝い

2012 年 5 月 31 日、タイ管区のシスターはバンコック市プラカノンに集まり、共に祈り、会の宣教 350 周年が意味あるもの、私たち会員の生き方、および私たちの友人の生き方に触れるものとするために、どのように記念し、祝うか話し合い、計画しました。初めに、会員で祈り、振り返り、ニコラ・バレに向かう 9 日間の祈りをすることにしました。

各共同体では、責任者が幼きイエス会の宣教 350 周年を記念のしるしとして、ローソクに火を灯しました。

2012 年 9 月 29 日、バンパイの学校でシスター　ユパ・スパスリが、幼きイエス会のシスター方が教えているタイ北部にある 3 つの学校の先生と職員のためにセミナーを開きました。参加した 90 名の方々はセミナーが行なわれたことに感謝し、幼きイエス会の霊性についてもっと知り、これからも学校で協力していきたいと言っていました。

2012 年 10 月 5 日、マレーシアのシスター　モーリーン・チュウが幼きイエス会プラカノン校で先生方に、バレ神父様の教育観について話をしてくださいました。

2012 年 10 月 6 日、チアン・コンのシスターたちが、先生と職員の方々に会の霊性について話をしました。

2012 年 12 月 24 日、シスター　ユパ・スパスリがチョンブリの学校で半日の分かち合いをしました。参加者は大部分が先生と職員で、140 名。創立者バレ神父様の霊性と教育の目的について、先生、職員の理解を助けるためです。チャイアプンのケン・クローでシスターたちといっしょに働いている信徒たちは昨年、数回集まり、会の宣教と霊性について考察し、分かち合いをしました。

管区長シスター　ジェイン・シンプラヨーンがシスター　モーリーン・チュウを招き、2012 年 10 月 16 日～17 日にかけてタイのシスターたちのために、ニコラ・バレ神父様の霊性について話をしていただきました。シスター　モーリーンはバレ神父様のビジョンと宣教に道を開く基となった 17 世紀のフランスにおける政治、社会・経済、宗教的状況の要点を話されました。シスターは、次のような非常に重要な点にも言及されました。

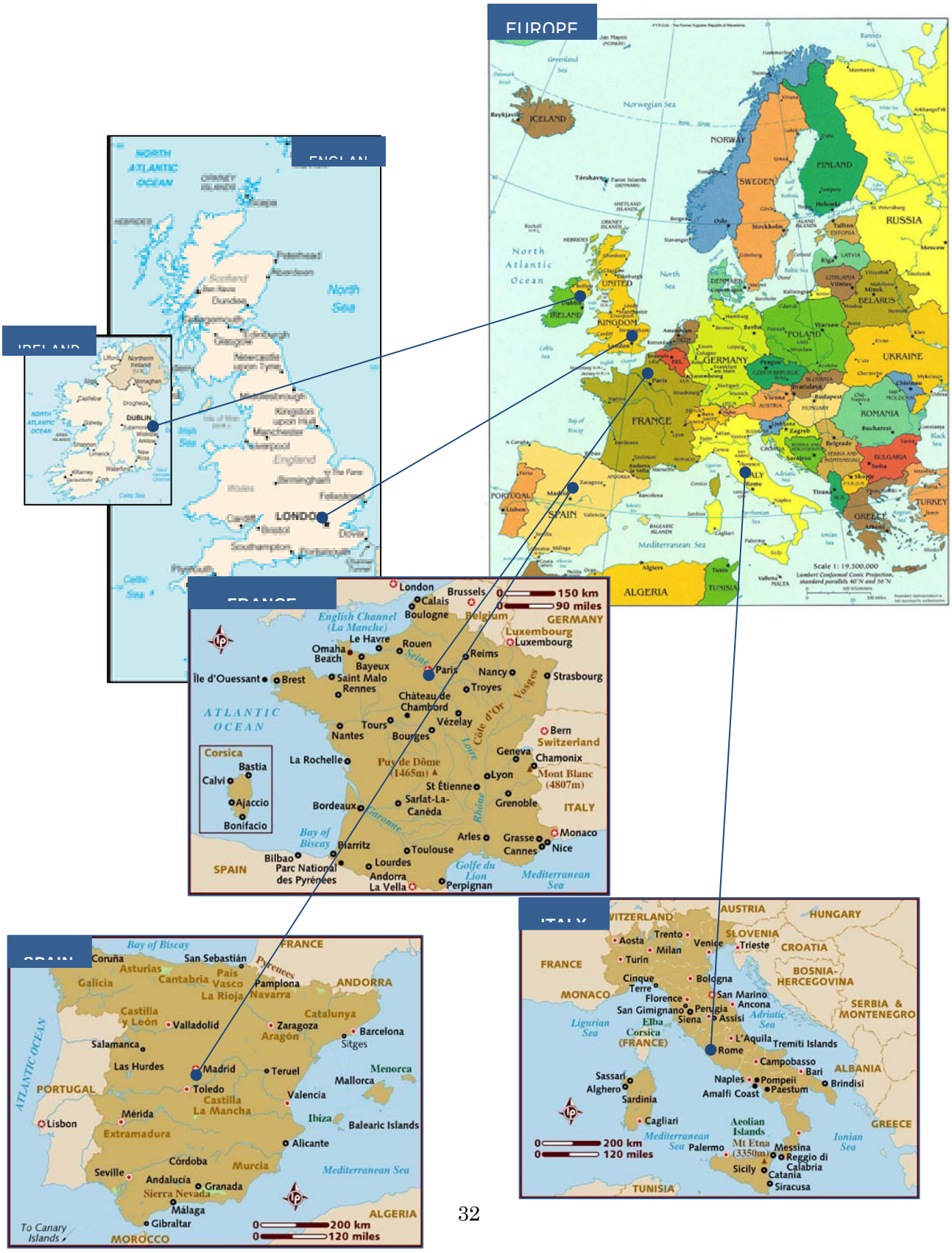
- ✓バレ神父様のビジョン：幼きイエス会の教育
- ✓バレ神父様の委託と謙遜の特徴
- ✓“修道者が陥る誘惑”とは何か。幼きイエス会の宣教使命を生きている今、どのようにしたら、実践的な意味ある修道生活を生き、キリストの証し人になれるか。

350 周年記念のハイライト

2012 年 10 月 20 日、ウボン・ラチャタニ教区のフィリプ・ブンジョン・チャイヤラ司教様の司式によるミサが 10 時 30 分より、平和の元后教会で捧げられました。チャイヤラ司教様の他に、方々の教区から 5 名の司教様と 40 名の司祭が参加、共同司式をしてくださいました。300 名を越す先生方、職員、卒業生がこのお祝いにいらしてくださいました。祝賀会は大成功。タイ管区のシスターたちはこの恵みに感謝し、託された宣教を生きていく勇気を与えられました。

Europe

ヨーロッパ



イギリス―アイルランド

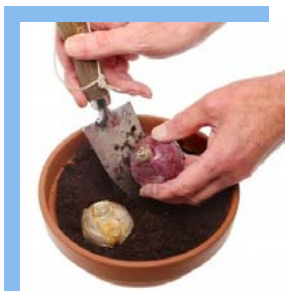
私たちの地域の黙想

指導ティーム(ノリーン&アイリッシュ)

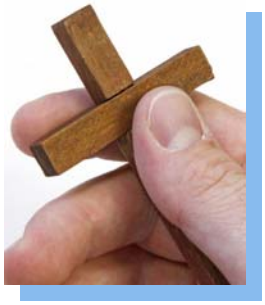
この２年間､私の黙想のパートナーであるノリーンと私は、小さい子供を持つ両親と地域の黙想を指導してきました。この期間に何人かの熱心な引退した教区民たちも黙想を経験したいという強い希望を表明したので、１０月には、彼らのために一度特別な黙想をいたしました！

この黙想は、８会期にわたり、そのグループは毎週１時間半の会合を持ちました。それは、特に神様の個々の私達への無条件の愛で皆がよく知っているイグナチオのテーマに沿って進められました。

熱心な定年退職者のグループの個々のメンバーにとっての大きな挑戦は、その週のテーマに関する聖書の一節について毎日１５分間祈りに集中することでした。各集会は彼らの祈りの成果を分かち合うことで始まりました。多くの人が、これには苦しみましたが、分かち合いはいつも誠実で、心を高めるものでありました。これに続いてノリーンと私が、次の週のテーマについて、短い話をしました。私たちは、それをなるべく簡単にして、私達自身の生活の中での経験談を含めようと努力しました。



毎回会合の中で、私たちの一人がその週のテーマに沿って、福音の個所の黙想に導びきました。これはふつうそのグループでは大変好まれているものでありました｡また週ごとに小さな儀式､特別には二つの儀式を思いついていました。週ごとに球根か、植物を鉢植えにしなければならなかったのです。これは、それぞれの人がイエスについていくという約束を表すものでありました。ちょうど植物が、育ち、花を咲かす為に水をやり世話をしなければならないように、イエスへの約束も育つよう世話をされなければならないのです。



ご受難の週の間　それぞれのメンバーは裏に自分の名前が書かれた木の十字架を受け取りました。それぞれはそれを手に持って彼らの人生における困難や問題を分かち合わなければなりませんでした。それは、大変心を動かされる経験で、多くの涙が流されました。それからすべての十字架はバスケットに入れられ、グループの人々の中を渡し回されました。その次の週の間私たちはその受け取った十字架の持ち主のために祈ったのです。

私は､幾人かの黙想者に黙想の個人的な経験について､数行書いてくれるように頼みました｡ここに、いくつかの彼らのコメントがあります。

週が進むにつれて私が、聖書を読んだり、考えたことを黙想していると、神はご自身を私に示されるのではなくて、神は、実際には、神との関係にある私自身を私に示そうとしてくださっているということに気が付き始めたのです｡」（アンナ）

「人々が、彼らの人生の中で何が起こっているかによって、いかに聖書を違った見方に調整していくのかを見るのは、興味深かった。みんなは、又彼らの個人的な話を分かち合った。時には、非常に感情的であったが、個人的には、私の夫の病気がどんなに私に影響しているのかを気付かせてくれることとなった。多くの信頼がグループの中に築かれたので、グループの人々は評価されることなく彼らの話を分かち合えると感じていた。私が特に好きだった黙想の部分は、ロール―プレイだった。それは、私自身がイエスの時代のあらゆる人物になってみることにより、まさに聖書を開いたと感じたのだ。この聖書に浸るという経験が、その後の黙想へと続いていったのである。」（テレサ）

黙想の進行係としての私たちに最終的に示されたものは、黙想者がその信仰を育てるだけではなく、私たちみんなが分かち合った経験を通して育つのだということである。ノリーンと私はチームとしてとてもよくやったし、私たちは、互いに頼りあうことをみとめあっているのだ。神の言葉は人生を変える力を持っているそして、相手がヤングアダルトであろうと、元気な引退者であろうと今までのところすべての黙想において、これを経験してきている。

アイリッシュ・オマホニー　IJS
eilishijs@gmail.com

「... しかしたやすはいことではなかった...」

学期が終わって、彼は彼の怒りの治療過程を続けることができるように粘土のバッグを担いで家に帰った。これは１４歳の男の子であり、その子に私が彼の怒りにうまく対処するような絵画治療を試していたのだった。彼は、「絵画治療はやさしくはないけど僕の怒りを、本当に助けてくれるよ。」といった。それ以来彼の母親は私に、彼が怒る時は今では彼の部屋に行って彼の怒りとなんとか向かい合い穏やかにするために教わってきた絵画治療を続けてるのだと言っている。

しばしば私はこんな風に神に感謝するのだ。人生の後半ではあったけど、絵画治療の訓練を受ける機会を得たことを感謝し、そして障害のある家庭からの子供たちが、できればよりよい生活をできるように、そして彼らを牢や精神病院から遠ざけられるよう援助を続ける機会を得ていることを感謝する。

２人の子供達と絵を書いている母がいます。彼らは実は、三つ子のうちの生き残った二人の子供なのです。三人目の子が亡くなり、彼らはその損失をそれぞれに苦労して乗り越えなければならないのです。

数年前、私がダブリンにいたときに、私はよく青年クラブのメンバーを訪れるため牢獄や精神医療チームによく招き入れてもらうことがあった。その頃、その時の州政府は私に絵画療法をしたらどうか

とすすめてくれた。このことは私に自分の才能を使って他人を助ける機会を与えてくれたのだ。私と一緒に絵を描いている子供たちは、ニコラ・バレに私たちの修道会を設立するようにと仕向けた子供たちのようだと、はっと思うことがよくある。若者たちとこの癒しの使徒職においてキリストと共になることのできる事は偉大な恩恵である。

私は現在、子供たちや若者と働いているほかの人たちの為の、情緒的、創造的発達のための絵画を教えるコースをたくさん持っています。このことは、障害のある家族からやってくる子供たちと共に働く多くの人々を助けることになるのだ。

私達が神から頂いた能力を発展させるよう手助けをし、今日の若者の必要としているものに出会う新しい方法を見つけるように励ましてくれる修道会に属していることは、ありがたいことである。

「少しの愛があれば、すべてをたやすくしてくれる。」
ニコラ・バレ

これは１０歳の子供が、彼女の双子の死にまつわる問題を解決してそれをこの絵を描くという行為以外にはどんな方法でも言語化することができなかった時描かれた絵の写真です。
このすべての過程には６週間がかったのです。

メアリー・ド・カーシー・マクドネル IJS
Harydecourcymacdonnell1@btinternet.com

島での生活の思い出

シスターキテイがこの記事を紹介してくれます：シスターアイタ・ヒギンズは９０歳で、彼女が楽しんでいる多くの興味あるものの一つは絵画です。この記事では、彼女が毎年やる展覧会に出そうとしている絵についての思い出を幾つか分かち合ってくれます。その展覧会はバリーフェリターで開催されます。バリーフェリターはよくシスターたちが休暇で行くアイルランドの南西の海岸にあります。近くにはブラスケット島があります。大ブラスケット島はこれらの島のうちで一番大きいのです。すべての居住者が去った１９５３年までは、居住者がいたのです。多くの人々は、このいまでは人気のない島を訪れ続けています。この場所こそが、シスター　ヘレン・ワインが、人のいない、今では見捨てられた小屋を写真に撮った所であり、その写真が、アイタの展覧会のための絵を描こうという気持ちを掻き立てたのでした。
私は毎年、復活祭頃にバリーフェリターで行われるイースター展覧会のための絵を描き始めました。題は、’Iarsmai　saol an Oileain’(訳者註：ケルト語)で、「島での生活の思い出」と訳される。それは、ヘレン・ワイン’が大ブラスケット島の小屋の廃墟を撮った写真から描いたものです。その写真では、

切り妻屋根の先端はまっすぐ立っていて、まるで私たちの誰かが、８０才代の後半であるかのように石の積まれた山々に囲われていました。私達の「切妻屋根の先端」－それがもし真っ直ぐ立っていなければ、傾き始めているだろう。年の経過による損壊は、私達には、どんなコントロールもできなかったが、私たちはいまだ私たちの思い出を懐かしむことができるのです。特に楽しい思い出は。

私たちが若くて、理想主義的だったとき、私たちはすべてを手放した。私は、それを後になって徐々に取り戻そうと多くのエネルギーを費やしたことに、こそこそした気持ちを感じないではいられない。私はいまの時代をとがめ、本、音楽、ラジオやテレビを楽しんで幸せです。私は、鳥、動物、木、蝶々、そしてもちろん、石についての本を持っていたものです。私は、私のケリーのダイアモンド(水晶)にしがみついていたことがありました。

また世界を横断してイギリスに戻り、やっとケリーの不思議な世界に戻ってきたという思い出もあります。このことが、私を‘Iarsmai’へ戻すのです。私たちは、過去一世紀の間に現れて変化していった因習的な宗教生活の遺産なのです。

未来がどんなものであろうかとみて見るは面白いでしょう、そしてそこにはなんらかのタイプの献身的使命もあるのだろうと思うのです。

その間に私たちは過去を神に感謝し、未来を神のみ手に任せるのです。

アイタ・ヒギンズ　IJS
宣と・ジョゼフ(コーク)

フ ラ ン ス　　奉献の新しい形

カトリーヌはニコラ・バレ・ネットワークのメンバーであることを奉献の或る一つの形を通して、公けにしたいと望んでいました。彼女の識別に同伴していた養成ティームと共に考察、振りかえり、話し合いの時を持った後、2012 年 11 月 17 日、誓願を立てました。以下は彼女の宣誓のことばです。

“私が積極的に教会生活に参加するようになったのは、娘たちが大学でキリスト教講座を受け始めた時です。娘たちと歩みを共にし、私自身の信仰を再び見出す機会が与えられました。信仰を完全に捨ててしまった訳ではありませんが、教会には行っていませんでした。

教会に真剣に関わるようになって、私の生活はますます意味あるものになりました。司牧に携わることを目的に、教区が養成の機会をくださいました。何年間かに亘る研究と学びの時をいただき、本当に感謝しています。私にもそのような養成についていけることが分かりました。

キリスト教要理教師として愛を込めて一生懸命に教会のために働き、教会と近隣の子どもたちにイエス・キリストを伝えました。そして少しずつ自信が持てるようになり、私に与えられたいろいろな賜に気づいていきました。人々は私を信頼してくださり、洗礼志願者の同伴を頼まれました。今も、私は心を込めてそれを続けてやっています。このことは私にとって大きな冒険でしたし、またそれによって新しい世界が私の目の前に開けてきました。

私の娘はある一つの若者のグループに属していますが、そのグループは集まって、シスター　ミッシェリンと分かち合いをしていました。娘は、“梅の木にサクランボの実を探すな”とか“神へ至る道はそれぞれ異なる”等のバレ神父様のことばを引用して、私によくバレ神父様のことを話してくれました。ひょっとしたら、私もバレ神父様の生き方に興味を持ち、神父様がどんなことをなさった方なのかを知るべきではないのかと考えるようになり、ある日、シスター　ミッシェリンに言いました。“大人のグループを作り、シスターがニコラ・バレのことを私たちに教えるというのはどうかしら”と。そして、ニコラ・バレの霊性を発見する私たちの旅が始まったのです。この旅は私をどこに連れて行くのか、全く想像出来ませんでした。彼の霊性が分かるようになるにつれ、私が生きる上で、それが益々大切なものとなりました。ピエール・キ・ヴィール　ベネディクト修道院で体験した意味深い、特別な時のことをよく覚えています。深い沈黙の中で、イエスが私のところにお出でになり、私の心に話しかけられました。その時以来、私の信仰は新しい局面に入ったのでした。

私たちはグループでいろいろなテーマについて考察しました。例えば、“謙遜に他の人々と共に歩むこと”“私たちの天幕を拡げること”“希望の女性であること”等です。この考察の時間は私自身の歩み

にとって、非常に意味あるものでした。私たちのグループはマリアに同伴し、彼女がフラテルニテに奉献する準備を手伝いました。これがチャレンジとなり、私の霊性が深められたと思います。

一方で私は、フランシスコ会のフラテルニテで人々が聖フランシスコの精神を生きることに賭ける姿を見、よく知っていることで、自分が問われていると感じました。“奉献という形をとって、私はニコラ・バレの精神にもっと自分を賭けていくことが出来るだろうか。”これが、私がティームに課題として問いかけ、この道を歩むようになった次第です。今日、ここに、私たちの歩みを継続し、ニコラ・バレの精神を生きる誓約を証しします。”

カトリーヌはルベで行なわれたミサの中で誓約を立てました。350 周年記念はこのミサをもって閉会となりました。

祝賀会と分かち合い

ピエール・グランドリー(作曲家/コメディアン)はミュージシャンのピエール・ラクロワと組んで、感銘を与えずにはおかない情熱的なニコラ・バレの生涯の旅路を髣髴させるショーを制作・初演した。バレ師は彼の時代、即ち、17 世紀のフランスにあっては、すさまじいまでの熱誠で夢を求め、その自分の夢を実現しました。彼は万難を排し、自分のビジョンを達成しました。それは、一般家庭の女児に無月謝で教えることでした。彼は更なる熱誠に駆られ、若い女性たち、この女性たちが最初の愛徳学校除女教師となったのですが、彼女たちを頼りに草分けとなる事業を展開していったのでした。

ルアン：開会式－連盟の姉妹たちと共に

グランドリーのショーの初演はルアンのソットヴィルで行なわれた。このショーの初演が、幼きイエス会創立の地で宣教活動をしている摂理会の創立 350 年を祝う幕開けとなった。およそ 30 名の幼きイエス会会員とその友人たちが出席した。

連盟として意味深い時を共に過ごす機会はこの年の間、何度かあった。その内には、3 日間のパリ/ルアン/アミアン巡礼があり、共に祈り、分かち合い、交わりの時を持った。これは私たちにとって、申命記 8 章に書かれている呼びかけを喜んで受け入れるチャンスとなった。

> *あなたの神が導かれたこの 40 年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。*
> *よい土地を与えてくださったことを思って、あなたの神をたたえなさい…*
> *主が先祖に誓われた契約に忠実であるようにあなたを強めてくださったのは主である。*

パンヌ　ミラボー(南仏)

150 名以上の方々がヴィトロル、レパンヌ、マルセイユから集まり、ピエール・グランドリーのショーを楽しみました。このショーを見て、神は、私たち人間が自由であることをお望みなのだと改めて思わされました。参加者は皆、私たちの宣教は今日的意味があると認識いたしました。目的達成を阻む障害が発生しても諦めないこと、そして、福音を生きるとは、金持ちであれ、貧しい人であれ、男であれ、女であれ、人を差別しないというニコラ・バレの確信を伝えるよう呼ばれていると感じました。

モンペリエ：5 月 12 日

このお祝いは参加した４人のシスターにとって、まさに真の意味での賜、小さな奇跡とも言えるものでした！幼きイエス会はモンペリエにはもういないのですが、高校の校長先生(女性)、校長職についてまだ１年足らずなのですが、卒業生や友人、同僚の先生方に声をかけ、集めてくださいました。

そしてここでも、ニコラ・バレのメッセージは今日においても意味あるものと再確認されました。

ロニー(パリ近郊)

どのようにしたら会の 350 年の歴史を小教区の信徒、近隣の方々、家族、友人にとって意味あるものとすることが出来るかと、問うてみました。会の長い歴史を通して縫う糸のように、３つのテーマを発表することにしました。

✱冒険・勇気・熱誠の 350 年

当時としてはめずらしく、しかも人々から強く非難された冒険に、若い女性たちを送り出したニコラ・バレの勇気と熱誠を思い起こしました。また、1789 年のフランス革命から、会が再生した時を生きぬいた姉妹たちの勇気と熱誠、初めてアジアに出発した姉妹たち、1904 年に施行された非宗教化法に適応していった姉妹たちの勇気と熱誠を想起いたしました。この同じ勇気と熱誠は現在でも見られます。、ナイジェリアの姉妹たち、ミャンマーで宣教を始め、今も続けている姉妹たち、そして、母院の将来に関して、難しい決断をした姉妹方の中に。

✱教育にかけた 350 年

最初から、大勢の若い女性たちが損得を抜きにして、教育に献身してきました。ニコラ・バレは、どのようにして若い女性たちに彼女たちの宣教使命の意味を徐々に教えていけばよいのかを、知っていました。彼女たちの使命は、一人ひとりが神の似姿に成長するのを助けることでした。その神は私たち人間を創造し、神を知ること、信仰を持つことから一人として除外なさらない神です。教育を受ける権利を持っていなかった女性や女の子たちにとって何とすばらしい福音だったでしょう！そして今日、大勢のシスターや信徒が子供たち、あらゆる年齢層の移住者に教育の機会を提供しています。

✱愛にかけた 350 年

カリタス。ニコラ・バレのモットーでした。350 年という年月を屈せずに継続するには、どれ程の愛が必要だったでしょう！愛は個々の、そして全ての人を成長させる秘密の鍵です。この秘密は世紀を

越えて引き継がれ、現代に生きる私たちは人類の成長のためにささやかな働きが出来ています。

若者たちが現代的な歌と踊りで、350 年の歴史物語を創造的に、愛をこめ、一生懸命に再表現しました。

“いのちの真価を探れ！　そうだ！そうだ！”

“あなたが行く道に佇んでいる、忘れられている若者たちに目を留め、彼らに手を差し延べて、それぞれの未来へと彼らを導きなさい。”

“愛を学べ... お返しを期待せずに愛しなさい。愛されたいという望みさえ持たずに愛しなさい... そして最後までそれを貫きなさい。”

ルベ(北フランス)

招待客、200 人を迎える準備が早くから始められました。ニコラ・バレの生涯と霊性を紹介する展示会を見ていただくためです。モニック・ドベイが作ったパネルにバレ神父様のことばを書き、ルベ、および世界中で行なわれている宣教の写真を載せたのですが、とてもすばらしいものでした。

ピエール・グランドリーのショーに続いて行なわれた話し合いから、この企画が、お出でくださった方々にとって感銘深いものであったことがはっきりと分かりました。以下はこの集まりに参加した何人かの方々の感想です。

✓ニコラ・バレは大胆な方でした。不屈の精神でご自分の道を見出し、艱難辛苦に耐え、神の霊に燃えて、真に神を探し求めてやまない方でした。

✓彼は疑いを持ちました。しかし、疑いの中にあって堅忍を知る人でした。彼の神との一致から、この特別な事業が生まれたのです。彼は時代の先端を行く人でした。女性に社会的地位を与えました。彼のメッセージには今も尚、今日的な意味があります。貧困と隷属に追い込まれている大人、子どもが今もいますから。

✓彼は今日、私たちに挑戦しているのだと思います。“皆さんもご自分の生き方の中で、神の場を提供しなさい”と。

✓一針、一針、縫っていくように、連帯も世界中で縫い上げられているのです。

✓どうしたら自分の中と他の人の中に神を見つけられるかを覚えなさい。生きている中で与えられるしるしに応え、前進しなさい。

✓いろいろと伺いましたが、つまるところ、和解が必要であるということでしょう。

ラ・マドレーヌ

ラ・マドレーヌのような高齢者の家でも、350 周年記念を祝いました。10 月 3 日がお祝いの日、大胆さと愛がいっぱいの日でした。

大勢の来客で広い茶の間も、ケア・ホームの利用者、家族、シスター、友人をお迎えするには小さすぎるほどでした。ニコラ・バレの生涯―お出でになった大部分の方々にとっては、余り馴染みのないものだったかもしれません―を簡単に紹介した後、説明つきのスライドショーが行なわれました。今日における私たちの宣教についてのスライドです。私たちは心の中で、ルベ、ルーマニア、チェコ、

ボリビア、ペルーなどに行きました。

お出でくださった方々はご自分たちの経験を分かち合ってくださるよう依頼を受けました。問いは、“皆さんご自身､教育者でいらっしゃいます｡どのようなことを分かち合っていただけるでしょうか。

✓私はボーイスカウトのリーダーでした。何年か前、50 歳の男性が私のところにやって来て、感謝したのです。驚きました。

✓私は歴史と地理を教えています。私は自分の仕事にも熱心ですし、生徒にも熱心に関わります。難しいクラスが変わっていくのを見るのは、本当に感動しますねぇ！

✓私は自分の仕事を楽しんでいます。主が私を通して働かれるのです。

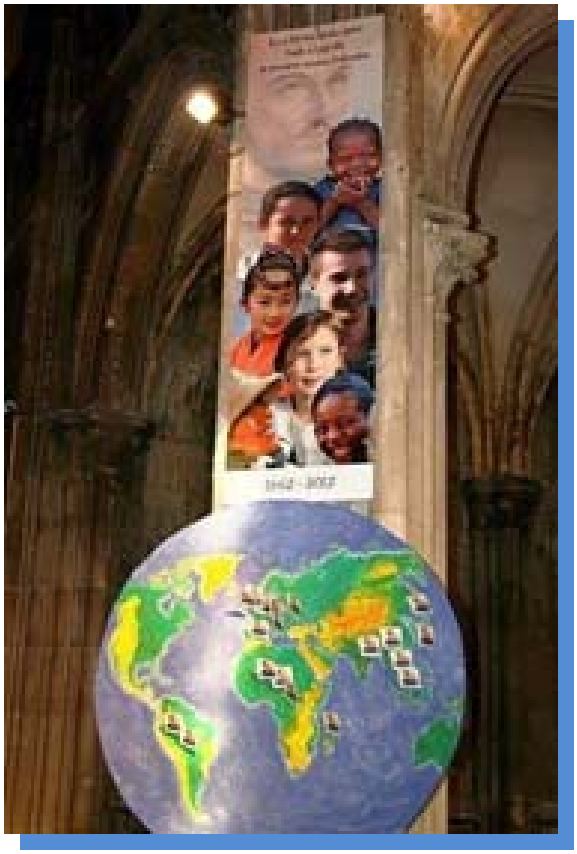
ツーロン＆マルセイユ

高齢のシスターたちにとってこのお祝いは家族、友人、同僚たちに、会の 350 年の歴史を語る機会となりました。ニコラ・バレ列福の時、アナ・ド・トラヴィとシスターマリ・ベルナールが作ったパネルを使って説明しました。

結び

350 周年記念を締めくくる集いは再びルアンで行なわれました。生徒、保護者、先生、友人など大勢の方々が積極的に参加しました。見る人に深い感銘を与える、新しいニコラ・バレの彫像が寄贈されました。ソットヴィル(ルアン)のニコラ･バレ小教区の信徒たちがミュージカル･コメディーを上演。17 世紀の母親と子供たちがどのような状況のもとで生活していたか、そしてニコラ・バレと初代のシスター方がソットヴィルにおいでになったことをパントマイムで演じました。

ニコラ・バレの霊性を共有し行なわれた 350 周年記念は、生き生きとしたミサで終りました。その時のことについて話す人がまだいます！



イタリア

「聖霊のお導きのままに」

私は管区総会に、少し途方に暮れながら、多くの疑問を携えて到着した。世界の危機のことや、宗教的生活はあまり意味がないのではないかといわれて、私は自分に「神は私達、幼きイエス会に今日何を期待しておられるのだろう。」問いかけていた。

管区総会参加者

しかしながら、この重苦しい雲は、私たちが信仰を持って、私たちの生活の実態を見つめ、自分たちを、現実から問われ、試されるままにさせた時には、急速に追い払われていった。

深い探究、聞き取り、熟慮のできる環境のおかげで、また、特に私たちが現在の状況を受け入れ、この数年間私たちの管区がたどった道を振り返ることができたという事実のおかげで、私は、自分の見つめる目が違ってきたことを感じ始めていた。私は未来をより希望を持って期待し始めたのだ。分かち合いの中で、私達は、自分たちの意見を守ろうとしたり、個人的な意見にしがみついたりしようとはしなかった。みな自分たちの現実に正直に向かい合ったのだ。350 年にわたる宣教の祝いを特に思い出して、私たちは私たちの歴史においての神のお働きを謙遜の気持をもって認め、今日熱心な神の招きが私たちに与えられているのを感じたのである。

もし神が無駄なものを取り去ることによって、私たちを清めようとなさっているのなら、たぶん神は私たちを本質的なもの、より透明な存在へと導かれたいからではないだろうか。神は私たちに前へ進む道を示しておられるのだろうか。これらのことを考えたとき私は、平和と新たな気力を感じたのだ。私は旅を続けたいという望みと、神の言葉をもっと注意して聞きたいという望みを感じ、またほかの人々と共に、増えつつある孤立してバラバラになった暴力にみちた世界を人間らしくする方法を探したいという望みを感じたのだ。集会の間中これらの言葉は私の中のここそこで響いていた。「あなた方の間で、すべての人々、すべての創造物の間で結びつくことにより、仲間の作り手になりなさい」と。

いま私たちが経験していることは、私たちに私たちのものの見方を変えるように求められていることである。即ち、新しいものの見方へ私たちを導いたり、私たちの目をほかの考え方へ向けさせたり、現在の体制を壊したり、私たちの固定観念を妨げたりしているのだ。

ついには、わたしは私たちが幸運であることに気が付いたのである。なぜなら、これすべてが私たちに受肉の神秘の理解を深め、それをもっと確実に生きることの理解を深める機会を与えてくれたのだから。私たちは、その秘跡が最も欠けていると思われるところにこそもっとその秘跡を理解するよう

に求められているのだ。私たちは、自分の独自性をなくす危険を冒してさえも、また人々の感じる共通のむなしさやおそれを感じる危険を冒しても群集の一部になることを恐れないように求められているのだ。

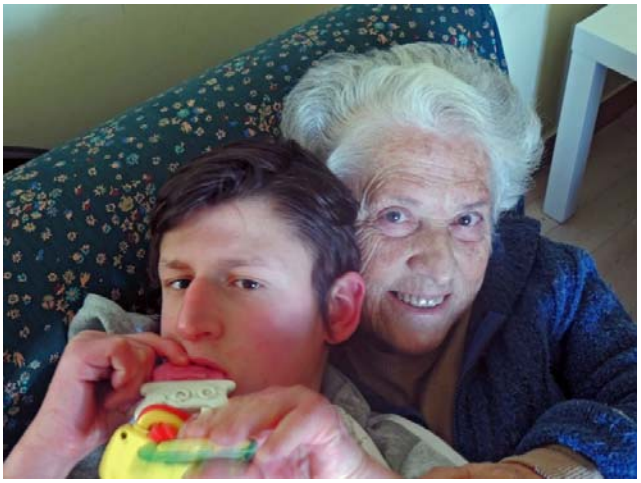
私は一人の学生の母親のことを考えている。彼女は私と話をしたあとで胸がいっぱいになって、言った。「私には、腫瘍があります。信仰を持っていませんが、どうか私の娘を援助する手伝いをしてください」と。私はフランコのことを考える。彼は「誰もが、何もかもに反対」であるような労働者組合でこう叫んだ。「しかし我々はどうなんだ。この経済的危機や、精神的危機に直面して何を望むことができるんだ。若い世代に、そしてこのむなしさに何を言えっていうのか。キリスト教徒はどこにいるのか」と。私はラビニアのことも考えている。彼女は教室のドアのところで私を呼び止めてこういった。「私は、私の生活を納得いくものにしたい。人生がそんなに無意味であることを納得できない。私は生きたいんです」と。

写真の説明
次に書かれたシンボルと共に 3 日間の集会の間に用意されたクリスマスツリー。
星:私はそれについていくために何をおいていかなければならないだろうか。
ろうそく：グループや、全体会での会話から得られた洞察
天使：未来への一つ、あるいは複数の夢

それですから、それは答えだすための疑問ではなくて、ほかの人と一緒に答えを探すものなのだ。「共にいる」ことに私を誘い、副音の言葉を共に分かち合う「群衆の一員」に私をしてくれるのは日ごとの出会い、会話そして出来事なのである。これらのことが、私を祈りや、より大きな自信を持って信じることに導いてくれるのだ。すべてを動かし導くのは聖霊である。私はついていくだけでよい。さらに、バレ神父様がおっしゃるように、私は「空間になって神様に所有していただく」ようにするだけでよい。私たちは神の生きた存在の住処となるように「神の中」にいさえすればよいのである。

マリーナ・モッタ IJS

シスターでありおばあちゃんでも...
そんなたくさんの子供たちの



正直に言うと、私は以前に自分にこんな質問はしたことがなかった。「シスターとして私はどうのような経験をしてきたのかしら。あるいは私はいまだに母親であることを経験しているのかしら?」 そして私の長い人生を振り返るとき、私はいまなおすべての婦人たちと同じく、私の母性は生きていて、行動の中に存在していることを認めざるを得ない。母親であることは、「愛を通して命を生む」ことであり、多くの女性によってさまざまな違う方法でなされう

る、あるいはなされている、物理的に赤ん坊を生むということとは違う。
私は、私の美術の先生のためのクラスを卒業して行った何十人、いや、百人もの若い人々のことを思い出す。これらの若者たちと何時間も共にするうちに、私にとって自分を生き生きさせるもの、即ち信仰、文化、自信、希望そして経験などを彼らに伝えていこうと試みた。何年間もかけて、彼らが努力し、間違えを冒しながらも人生の道を何とか見つけようとして成長するのを見守ってきた。私は彼らに共感し、彼らの喜びや悲しみを自分のものとし、彼らを励まし、必要なときには危険に気付かせてきた。できる限り彼らと連絡を取り、彼らが人生の浮き沈みを経験している時、神に彼らをゆだねたのだ。

私が付き添い、私自身の神の探求や、休暇の喜びを分かち合った習練中の若いシスターたちのことを思い出す。私は、特にチェコ共和国出身の若い婦人たちのことを考えている。彼女たちには、彼ら自身の国で、彼らが人生の中で、召し出しに気付く時まで、2 年間以上付き添っていた。その後何年もたつ今でもこれらの若い人々の喜びや悲しみを自分のものであるかのように思い出すことができる。私は、彼らに子供ができたときや、仕事が失われたり見つかったりした時、又彼らの誓いを表明した時などなどに彼らと気持ちを分かち合うのだ。

今日、神は私に、もう一つ別の母親としての経験をくださった。それは、障害を持った子供たちのためのベタニアの家（ベタニア・ハウス・トラスト）のひとつであるここカラで「おばあちゃん」としての経験である。この 10 年間わたしは、ここにカラとアンドレアとすんでいて、のちに、ミリアムとケリーが加わり、最近になってアレッサが加わった。私は、すべての「おばあちゃ」）がすること、―彼らと遊んだり、慰めたり、食事を与えたり、着替えさせたり、料理、洗濯、アイロンがけなど―家庭の一部であるすべてのことをしている。彼らの小さな達成を見ることは、なんという喜びであろう。ひとつの達成にはそんなに多くの手伝いと努力がいるのだから！ 例えば、アンドレアが彼女の好きなゲームに立って届いたりできた時、カラがシャワーのために洋服を脱ぐことができた時を見ることはなんという喜びであろうか。

この 10 年間の間に、よく私はこう聞かれる。「でも話すことができず、さらに多くの援助の必要性のある若い人々と一体どうやって一緒に住んでいけるのですか」と。私は、それは私にとって特に大きなやさしさの経験なのですとだけ答えることができる。これらの若者たちは、無意識に彼らの中に純粋に真の精神を持っているのです。彼らは、不思議だとか、素晴らしいとか言わないでも自分を表現する方法を持っています。例えば、カラがにっこりして私の手をミリアムが、不安定な健康状態と、絶え間ない痛みにもかかわらず満面の笑みを浮かべて目を覚ますときは？彼女は生きていて新しい日の光を見て嬉しいのでしょうか。

私には、この質問の答えは消してわかることはないでしょう。私がただわかることは、これらの若い人々が彼らの「特別なおばあちゃん」に静かな喜びを伝えているのだということ。毎日、世界中の「すべてのおばあちゃんたち」がしているように、彼らがうまくやっていけるようにすべての小さなことを愛情をもってすることで、彼らの人生を豊かにしようと努力している「おばあちゃん」に。

Maria Paola Romanelli IJS

valepoaola28@tiscali.it

スペイン　　愛を爆発させなさい！

スペイン、ブルゴスで、私たちの会の最初の学校の創立３５０周年を記念する催しがありました。その一部をお知らせします。

その日は寒い日でしたが天気は良く､生徒､先生、父兄、関係者が集まって、私たちの学校の先生であり、仲間であるファウステイーノ・ディエスが作ったＣＤのリリースを祝いました。ファウステイーノは私たちと共にこの学校で教えていて、今回特別に記念のＣＤを作ってくれたのです。彼はバレ神父の精神を愛し、音楽が好きで歌を幾つか作曲しました。

私達は一つの大きな家族として、ともに歌い、踊り、劇をし、ホットチョコレートを飲み、大いに楽しい時を過ごしました。これはその歌の一つです。

お祝いをしよう

楽しもう　この日を祝って
イエスさま　あなたとともに
ハンドインハンド
私におまかせください
音楽もいいじゃない？
湧き出る力はイエスさま
きっとつくれる、違う世界を
私におまかせください
あなたのほほえみはひかり
あなたの声はやさしさ
あなたの両手は自由を招く

あたらしい民になりなさい
自由の民になりなさい
　地の塩になりなさい
愛を爆発させなさい
ドアを開いてごらん
流れる風はイエスさま
吸い込みなさい、主の神秘を
私におまかせください
みんなをじっと見てごらん
イエスさまはみんなの目の奥に
　あなたにウインクしていうでしょう
わたしにまかせなさい
あなたのほほえみを

とても豊かな体験でした。運動場で大勢の子供たちが集団ゲームをしていて、幾人かの若者が手伝っていました。大人たち、特に父兄たちはニコニコ顔で、見ている彼らも楽しそうでした。このやり方

は分かち合いにも教育的にも優れていて、シスター、先生にとってもこの祝賀会は非常に有意義なものでした。

ニコラ･バレのメッセージを聴いた信徒はそれをまた他の人たちに広めてくれるので､有難いのです。

私達は、学校でこの歌詞の意味の、より深い知識を教えていくことにしました。ニコラ・バレのインスピレーションを通してイエスからのメッセージとして。私たちは教育を通して生き方を新たにしていくよういつも求められているのです。

（ファウステイーノと彼の音楽については Google と Youtube　Fausutino Diez で検索）

「ハンドインハンド」

飢餓撲滅運動の２５周年を迎えるにあたってこの活動の始まりを思い出す。私達はベンビブレの学校、ヴィルヘン・デ・　ラ・ペーニャの生徒たちにもっと認識を強め、連帯の意識を持ってもらいたいと思っていた。

まず私達は、スペインの教会が世界中で展開を進めているプロジェクト､「ハンドインハンド」運動のキャンペーンを始めることにした。

そうして私たちは歩み始めた…

若者の意識を上げ、彼ら自身で行動するのに手を貸すという方法を見つけたいと思った。彼らは最初、小さなことから始め、段々にいろいろな活動に参加していった。

出発点は「大人」も一緒の学校内での活動だった。そして徐々に司牧の若者グループと他の学校の生徒もかかわりを広げていった。

私達は、独自に資金集めを考えだし、洪水などの災害が起こった時にキャンプ用品を配るなど具体的な援助をして子供たちや他の人たちを助けられるように備えている。

働きかけの一つは、どの年代の誰もが出来るウオーキングを主催することだった。若者は何マイルも歩ともかく皆行けるところまで歩い歩いた後、この若者たちがお母さたちの愛のこもったお弁当を分けうのを見るのは感動的だ。それは

でるき、た。ん合与え合うことの学びの第一歩だ。全行程の記録にはスポンサーがつき、全てが上手く計画されていた。

また古紙や段ボール、ビンを集め、アストルガで売って新しい活動のためのサポート資金とした。

そのうちに私たち自身が「ハンドインハンド」活動をやっていこうと決め、情報や資料を通して新しい活動やプロジェクトを見つけることができた。

参加の形式も変わり始め、大人と子供はウオーキングに参加した。重要なことは、「ハンドインハンド」の記録資料を市役所の前やサンタバルバラ広場で一般の人達に聴いてもらうことだ。私たちはこのイベントにより多くの興味を持ってもらうために、歌手やミュージシャン、マリベル・ド・ヴィラフランカとアルベルトも招いた。キャンドルがとても良い雰囲気を盛り上げていた。

学校の火曜集会で、司祭、シスター、信徒との飢餓撲滅ウオーキングの準備をした。

その後、教区の新しい人たちがイベントを企画しはじめ、私達はできる限り参加を続けている。

新鮮な風

マドリッド・コミノテの姉妹たちは、何人かの信徒と共に、生活や私達の記録、他の教会との情報交換、いま話題になっていることについて何年間も分かち合い、振り返りのミーテイングをおこなってきた。

このグル—プはシスター達が、学校の先生、そして自分

たちの仕事や教区で知り合った人達を招いて始めたものだ。

通常月一回集まって､前もってそれぞれ準備した問題について話し合う｡テーマは今現在の関心ごと、あるいはセントラルチームや管区チームから送られてきたテーマについての意見交換もする。信徒は私たちの仕事や、活動について分かち合い、学校の活動にも参加する。彼らは徐々に私たちの生き方や精神性に関心を深め、私たち以上に「エキスパート」になっている人もいる！

メンバーの多くは管区が毎年催す「祈りの日々」に参加する。この 2,3 年は数人が管区総会と総会に参加している。

この体験は私達姉妹に何をもたらし、教えてくれているだろうか？

＊ 新鮮な風
＊ 検討しているテーマについて、より新しい、広い考え
＊ 私たちの、時に狭く不完全な視野を広げてくれる、生き方に対する別の見かた
＊ 教会の兄弟姉妹としての新しい形
＊ それぞれが選んだ生き方に従って信仰と献身に生きるべきだ、という一致の信念
＊ 私達皆の絆を強める豊かな連帯体験
＊ 私達の一致こそが教会であるという確信

これらすべては信徒にも当てはまると言える。彼らは祈りの日々に関して、毎年のこのイベントをとても楽しみにしていて、自分たちにとって必要なことだと言っている。

しかし、私たちの集まりは考察ばかりしているわけではなく、一緒に過ごすことを楽しみ、終わりには決まって何か食事を共にする。学校の夏休み前の年度末にはお祝いをして午後を共に過ごす。

グループは徐々に絆を強め、変化しながら成長している。今年は参加者を募ったので人数が増えた。

いつもの福音の生き方の他に、特に最もそれを必要としている人達にイエスキリストを知らせ、愛させるというニコラ・バレのビジョンについての分かち合いをする。

私達の望みは､「あなたたちと私達」の関係を超えた、総合の「私たち」の関係に行きつく、完全な一致の方法を捜し求め続けることだ。私たちは旅の始まりにいるが、もうすでに一歩一歩あゆみ始めて　いることに気づいている。命をもたらす共同体；一つの精神、一つの

使命、一つの心で生き、祈り、考察する一致の共同体となるように。

マドリッド・コミノテ

Latin America

ラテン・アメリカ

SOUTH AMERICA

PERU

BOLIVIA

私達、ボリビアの姉妹は会の３５０周年を祝い、たくさんの勇気と喜びを与えてくれた、いろいろな行事について分かち合いをしています。

お祝いのイベントに参加した子供たちの感想と体験をいくつかお知らせします。

司教、司祭の共唱によるミサ(アサンガロ)

「ポルコの友達と一緒に行ったアサンガロの遠足が楽しかった。お互いのことを知って仲よくなれた」
マリ＆グスタヴ

「パーティーの雰囲気がすごく良かった。このことは皆ぜったい忘れられない」　グロベル＆パオラ

トラピコの子どもたち

「この会でニコラ・バレ神父様のことがよくわかった。他の子たちとも仲良くできたし、みんな親切でいい人たちだった」
スィルダ＆デニルソン

「ミサが良かった。神父様がイエスさまのことを話してくれて、みんなとてもハッピーになれた。ほんとにお祝いって感じだった」クリスチャン＆レニ

「一番よかったのは、ニコラ・バレ物語の劇をやって、彼のしたことを教わったこと。読み書きを習えるようにしてあげたから、子供たちがもう道端でウロウロしなくなったんだよね」
ダイネ＆ジャスマーニ

ポルコの子どもたちによる劇

「ゲームが楽しかった。すごく面白くて僕たちも他の子たちもみんな大笑いしちゃった」
レイナルド＆ガルデニア

「他の人とミサにいっしょに行ったり、歌ったり、ゲームをしたり踊ったりしてとっても楽しかった」
バネッサ＆エルリン

分かち合いの時

「ミサが終わってから、ママたちが作ったご馳走を食べた…おなか一杯になっちゃった！」
ブリヤン＆ガブリエラ

「『小さい鉱夫たち』のダンスが良かった、他の学校のダンスも」　ジョニー＆アビガイル

「子供たちの劇やダンスを見た。わたしたちも踊ったし、他の子供たちも一緒に入って踊ってくれた。すてきなパーティーだった」ヴラディミル＆エリカ

「パーティーが終わった時、みんな一人ひとりに素敵なプレゼントをもらったの。暖かいマフラー、すごく気に入った！」エルマー＆ジャスミン

「イタリーとかスペインとかペルーとか、いろんな国から来たシスターたちと会えてとてもうれしかった。みんなポトシで僕たちと一緒に過ごすためにボリビアに来たんだって。知り合えてすごくよかった！」　ダヤナ＆ダグラス

アサンガロの子どもたち

鉱夫の子供たちの生活

ポルコはポトシから１時間も離れた海抜４２００メートルにある。人口の大多数が鉱山労働者である。私たちは「だれも行かないところでの生活の選び」への求めに応えることに決めて、２０１２年にここでのミッションとコミュニティ体験を始めた。

ポルコの鉱夫と子どもたち

鉱夫の暮らしは非常に過酷だ。この共同体にいなければ、理解することもないだろうし、したくなくても批判をしてしまうかもしれない。そこでは人々の悲しみを忘れさせるためにいつも何かの祝い事がある。ボリビア経済は鉱業に依存している。鉱山労働者が不当に重労働を強いられている一方、贅沢な暮らしをしている人もいる。鉱山は安全対策がないために鉱夫は山で死ぬことも多い。この人達は命がけで奮闘しているのだ。ここに私たちの体験のいくつかを紹介する。

＊ 私たちの学校では毎日授業の前にお祈りをする。子供たちに何か特別なお願いをするように言うと、何人かの子供たちはいつもこのように言う。「神さま、お父さんを守ってください。危険なところで働いているお父さんを無事に家にかえしてください」　これをきくと頭からバケツで冷水を浴びせられたような思いになる。なぜならこの子供たちの何人かは、棺の中の父親にしか会えないかもしれず、あるいは父親の顔を全く見られないということさえあるのだ！自分がその同じお願いをする子供だと考えてみてください、そしてお父さんがこう言っていたのを思いだしたとしたら。「帰れるかどうかは神様だけがご存じだ」

＊ 以前私は子供たちに、あなたたちを愛してくれる人を絵に描いてごらんなさい、と言ったことがある。しばらくして、一人の子供に尋ねた。「なぜ何も描かないの？　みんなもうおわってるよ」その子は泣きながら言った。「だって愛してくれる人なんていないもん」このようなことを聞くと、ここの家庭には優しさというものがないのかと思うかもしれない。彼らは子供を思っていないのではなく、それをどう表わしたらいいかを知らないのだ。父親が子供に「愛してるよ」などということはない。彼らの文化から見て愛をしぐさで表すこともほとんどない。でも、ここのお父さんたちが子供たちのためにどれだけ頑張っているか見ればわかる。子供たちを愛しているからこその頑張りなのだ。

＊ 私たちが学校に入っていくと、子供たちは走ってきて抱きついてくる。私たちにすべてを忘れさせるほどの愛で。彼らはいつだって愛を与える用意ができている。

＊ 勉強よりもお金に関心がある若者もいる。そうすると彼らは学校をやめて鉱夫になる。それでもここには、人生を前向きに生きたいという抱負や喜びや熱意に燃えている若者もいるのだ。

私達は修道女として恵まれている。なぜならこのような人たちと生活を分かち合うことが出来るのだから。彼らの生き様は、私たちの意欲を掻き立て、希望を持ち続けるよう招いてくれる。ちょうど私達が、神に捧げた命を全うできるよう、神が今日もいつも私たちを招いてくださっているように。

スレマ　コンドリ　ヤノス　IJS

素晴らしい人生体験

神様に心から感謝したい。セントラルチームの姉妹達、ボリビアのコミノテ、そして特にアイルランド、イギリス、チェコの親愛なる姉妹たちに。

夢をかなえてくれたこのすべての方たちに神の恵みがありますように。夢はいつか必ず実現するから持ち続けるべきだと、私がいつも言うのはこの体験があったからだ。大切なのは神に絶対の信頼と希望を置くことだ。祈って頑張り続ければ、神はすべてに心を配ってくださる。

国を出て愛する人たちから遠く離れて、他国で共同体体験をし、知らない場所で新しい言葉を習うことは神が招いてくださったすばらしい体験だった。
歓迎の精神は幼きイエス会の特徴の一つであり、私達がいつも実行するように心がけている大切なことだ。私が最初に到着した時も、アイルランド、イギリス、チェコのシスター達は両手を広げて迎えてくれた。彼らの愛と配慮は私を勇気づけ、この体験を始める期待で一杯にさせた。

初めの数か月はバリムーンでアン・マリ・リャンと一緒に住み、とても有意義な共同体生活を過ごした。バリムーンはニーズの多い所だった。私は人々の、人生に対する愛や、互いに尊重し合うことが欠如している、ということに気づいた。このことは多かれ少なかれ私の国でも同じ問題をかかえていた。この気づきが.私に、自分の目の高さを超えて、会のレベルで考え始めたるようにさせた。聖霊にも姉妹にも助けられて、私は自分の国と全く違う文化を理解し、認め始めた。

最初の大きなチャレンジは新しい言葉を学ぶことだった。学ぶ熱意、かなりの努力、勉強、献身が必要だった。理解が出来ないことに無力と怒りさえ感じた。時には涙も出た。自分の心にある沢山の思いや感情を分かち合いたいのに言葉のせいでできないのだ。私は英語を話し、理解できるようになるために、神に謙遜と忍耐を教えてくださいと心から祈った。イエスは決して放っておかれることはなく、私の道に素晴らしい人々を置いてくださった。私は彼らのおかげで、言葉だけでなく沢山のことを学ぶことができた。

ダブリンでの８か月の後、私はコークに移った。年配のシスター方の家、セイント・ジョセフ修道院で生活することは神からのもう一つの贈り物だった。そこで私は非常に貴重な生き方を学んだ。６０歳から１００歳のシスターと暮らしを共にすること、それはまるで海に潜って深海ではっきりと、彼女たちひとりひとりが贈り物であることを見つけた、そんな感じだ。イエスに対する無条件の愛が、彼女たちを自国や外国で素晴らしい宣教女にさせていた。

どうしても受け入れ難く思ったことは、ずっと分かちあってきたシスター方の死であった。私の兄のミゲル　アンヘルがなくなった時には心臓を突き刺されたような気がして大変つらかった。この時私は自分がどうするべきかわからなかった。アイルランドを去って家族のいる国に帰るべきだろうか？知らせを受けたとき私は聖堂でイエスに話しかけた。イエスはとどまる勇気をくれた。イエスの苦しみに比べれば自分の苦しみなど些細なものだと考えることもできた。その苦しい日々私は神にしっかり繋がって、前進を続けることができた。世界中の幼きイエスの姉妹を通して、愛を示してくださった神に感謝している。私は苦しみが彼ら皆の祈りで癒されていたのに気付いた。神と会への私の愛は、姉妹たちの存在とその愛、笑顔、気遣いそして励ましの言葉への感謝となった。

イザヤ 41.8-11「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる」は、アイルランドにいる間私を支えた御言葉である。この体験全てと、イエスへの愛は、私を人として、修道女として、友として成長させてくれた。私は若い姉妹にも年配の姉妹にも彼ら自身

のため、会のために、このような体験をしてほしいと思っている。皆さんの上に神の恵みがありますように。

レイナ・フエルテス・ママニ　IJS

ペルー　　修道会創立 350 周年とペルーでの宣教 45 周年を祝って

祝事の年に当たる今年は、リマにおける国際的な集会、会の顧問会から始めることになりました。私達の準管区にとり、喜びと希望に満ちたミーティングでした。

レヒナとマリア・ルイサ

年間を通してさまざまな場でシスター達は一般の方々、学生、卒業生、友人方、そしてその土地の当局者の方々も共にお祝いの企画をたてました。長年にわたり勇敢に、質素に、親密に協力し合って働くことができ、皆、感動しました。

一連の祝事には、シスターホセフィーナ・バイエス、マリア・グロリア・コル、アナ・マリア・ダルマウの訪問も重なり、私たちにとりましては大きな喜びと恵みでした。

5 月 31 日、ニコラ・バレ師を思い起こし、ウルバンバでは先生と生徒達の準備によりミサが捧げられました。私達の誓約を新たにし、先生や生徒達と共に、日々、愛のうちに生き、“小さな愛は全てのことをたやすくする”のモットーを思い出しました。

ミ・ペルーでは、幼きイエス会創立 350 周年を祝い、生徒達が作った看板とランタンを手に行列した後、参加者全員でペルーの文化に彩られた夕べを過ごしました。

クスコでは創立 350 周年・ペルーでの宣教 45 周年記念ミサが、イエズス会の教会で捧げられました。司式司祭は、バレ師が修道会を設立した時の彼の心の広さと素晴らしい先見の明を強調されました。勇気と創造力のカリスマに生き、現在置かれている国々の現実において、そのカリスマを発揮している私達シスターの力強さについても、彼は語られました。

準管区・地区総会に出席したシスターたち

2013 年度　ペルー・ボリビア総会

私たちはセントラル・ティームからの書簡を読み、準管区・地区総会を開始しました。シスターカルロッタは、総会が 2012 年 6 月に告知された事を私達に語り、引き続き会の書の 85 項と 87 項を読み上げました。私達の 2013 年度ペルー・ボリビア総会は多様性の中の一致を示しました。“聖霊に心を開き、最も貧しい兄弟達のために神様が望まれている事を見出しましょう。”幼きイエス会のシスターとして生きるよう召命を受けたこの道のりの始まりは、全てのシスター達にとり、感動的でした。

私達の修道会が誰をも受け入れ、質素で一致できるよう願います。一日の始まりには、聖歌に耳を傾け、マタイ 11 章 25 節を黙想しました。

“天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。”

コリントの信徒への手紙 I　12 章 25～26 節

“体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。”

2007 年の総会から、私達は共に旅を続けて来ました。神中心に生き、幕屋を拡げる心の用意をし、兄弟姉妹と共に謙虚に歩み、現代社会において希望を持ち続ける女性でありたいという、霊の促しを感じました。

“いのちを選びなさい―共に生きる生き方”を生きながら、私達の旅は続きます。私達の準管区・地区総会ともう直ぐ始まる総会は、準備に自分たち自身を賭けるよう、私達皆に呼びかけています。

誓　願

イタリア

終生誓願

シスター　ロミーナ・ペロッタ IJS

2012 年 9 月 29 日

カメルーン

オルタンス＆マリ・ベルティユ

初誓願

シスター　オルタンス・チュアタ IJS

シスター　マリ・ベルティユ・エロガ IJS

2012 年 10 月 6 日

カメルーン

終生誓願

シスター　リディー・ンゴノ・アンデラ IJS

2012 年 10 月 20 日

ナイジェリア

フィデリア＆リタ

終生誓願

シスター　フィデリア・ゴウォン IJS
シスター　リタ・シューメン IJS

2012 年 12 月 28 日

リーダーシップ・ティーム

スペイン

左から右へ：ピラール、グロリア、ヨランダ

管区長：

グロリア・ヴィニョッテ

cvignote@gmail.com

ティーム・メンバー：

ヨランダ・ブスト

ピラール・タラサガ

ナイジェリア

(左から右へ)カテリーナ、マリア・ヘスス、ベネディクタ

地区長：

マリア・ヘスス・マヨール

mjesusmayor@yahoo.com

ティーム・メンバー

ベネディくた・エイダン

カテリーナ・ドルチ